



二十四輩順拜圖會

後篇
武蔵

八波
1810
10-6



二十四輩順拜圖會

俊高
武臣

八波生
1810
10-6

二十四輩巡拜圖會

金皇李
金皇李
金皇李
物澤清

門波子
號1810
卷10-6

嗚呼懋哉此舉 聖祖已寂五百餘年其
東關北陸之靈躅赫々乎斯存唯其有
之在人之日睫也披閱焉者雖身未動
座足未踏地猶遍巡拜於彼自為念報
之助此舉實懋哉前篇已上木後篇將
刻乞余一言因卒書冠其端
文化六星次己巳冬十月

浪速

寶明題



寶明題
浪速

門波子
號1810
卷10-6

嗚呼懋哉此舉 聖祖已寂五百餘年其
東關北陸之靈躅赫々乎斯存唯其有
之在人之日睫也披閱焉者雖身未動
座足未踏地猶遍巡拜於彼自為念報
之助此舉實懋哉前篇已上木後篇將
刻乞余一言因卒書冠其端

文化六星次己巳冬十月

浪速

寶明題



皇本
皇本
皇本
皇本

皇本
皇本
皇本
皇本

親鸞聖人 二十四輩順拜圖會後篇卷之三

目録

武苑園之部

浅草御坊

生神の天神の事

浅草の一家

天川山明福寺

築地御坊

瓦玉権現の感

浅草高龍山報恩寺

御堂院の地は龍と云

信交及を極若と擲

西光院

御門至御通切

麻生若後寺南方

法苑上人言水の窟

龍返の宝剣

瓦子極若の説

おむくける像

亀子山若後寺

以上

二十四輩順拜圖會後編卷之壹

武苑園

上野園麻橋より江戸日本橋まで 延暦二十八年

河州専教寺

了貞撰

○上野より出下野下総常陸の方へ巡拜と云付武苑園を序踏み築地より今更記と云り上州麻橋より武苑園に府浅草報恩寺へ巡拜し更より東の方下総へ到り後江戸表に出る築地御坊若後寺より系流と云り乃換子と記せり

浅草御坊

江戸浅草よりあり通して 浅草御門跡と換尺

东本願寺御門跡御坊所なり奉山より輪番加番の僧衆を来ししめ

高貴の寺に宿を伺ひ奉と辨り兼て関东の門末と教示せしめ終る堂宇巍くとしし系師の奉山より次り ○本堂二十又間口面丸に敷樓右に釣鐘堂正面唐門惣

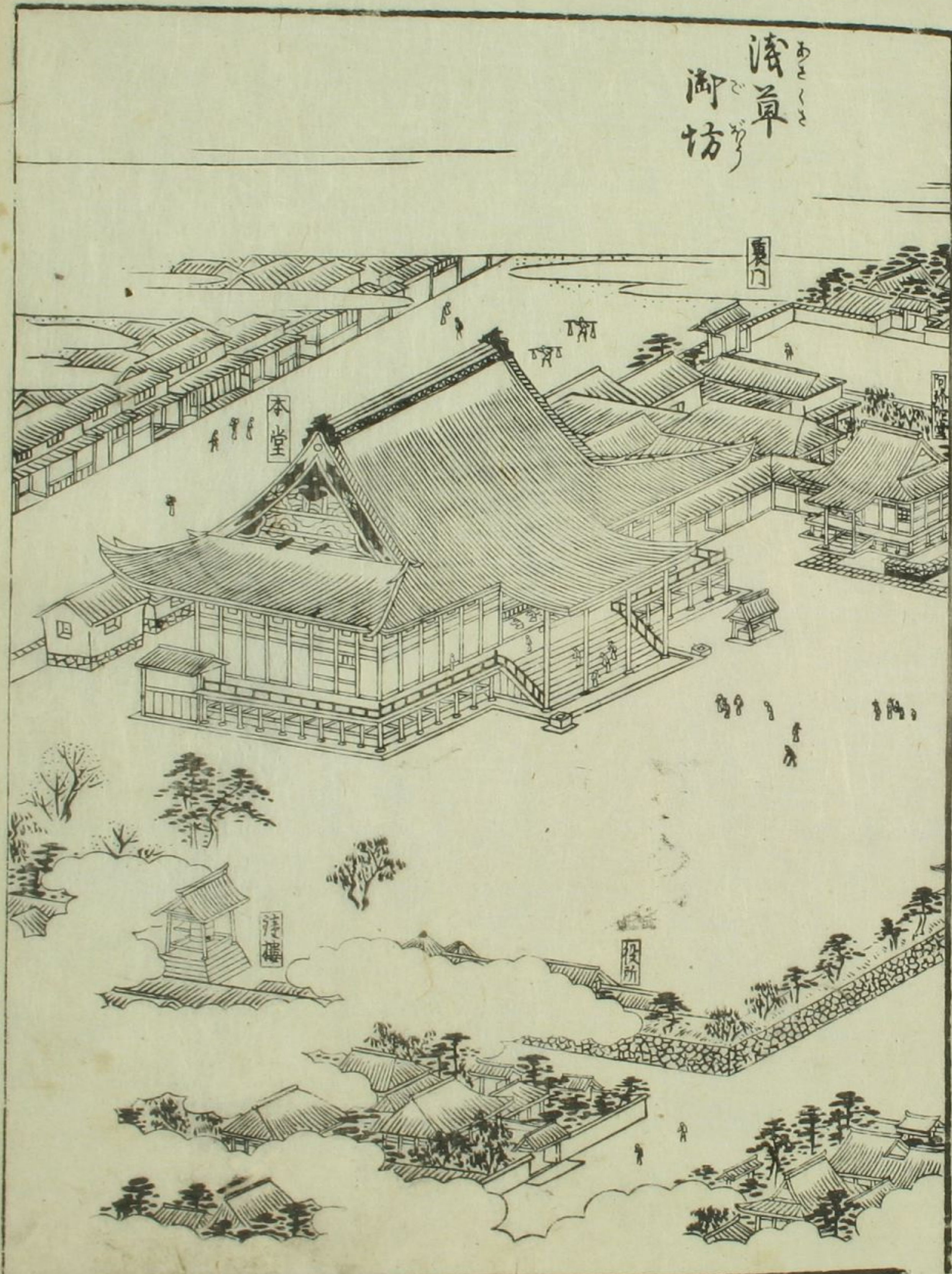


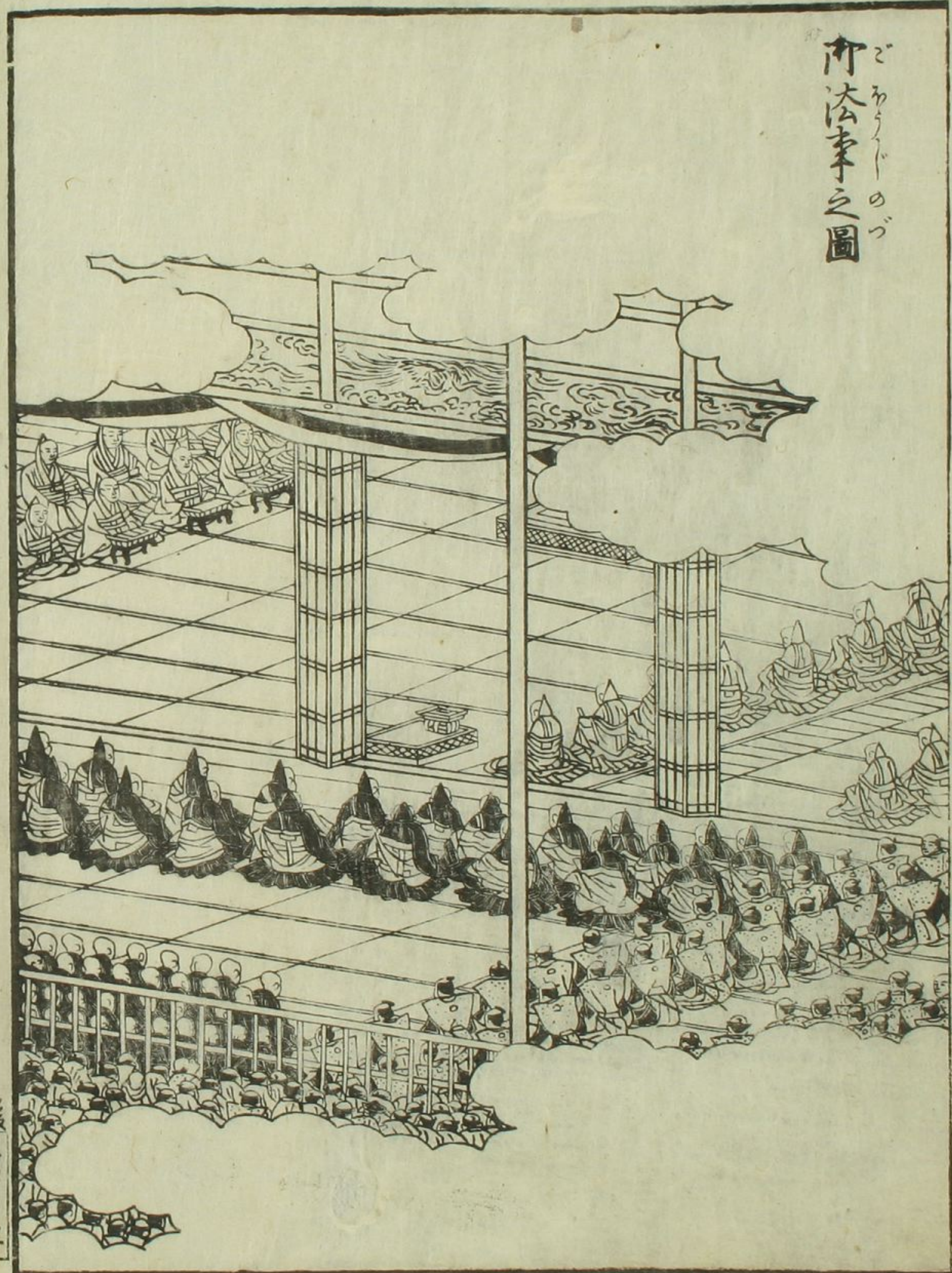
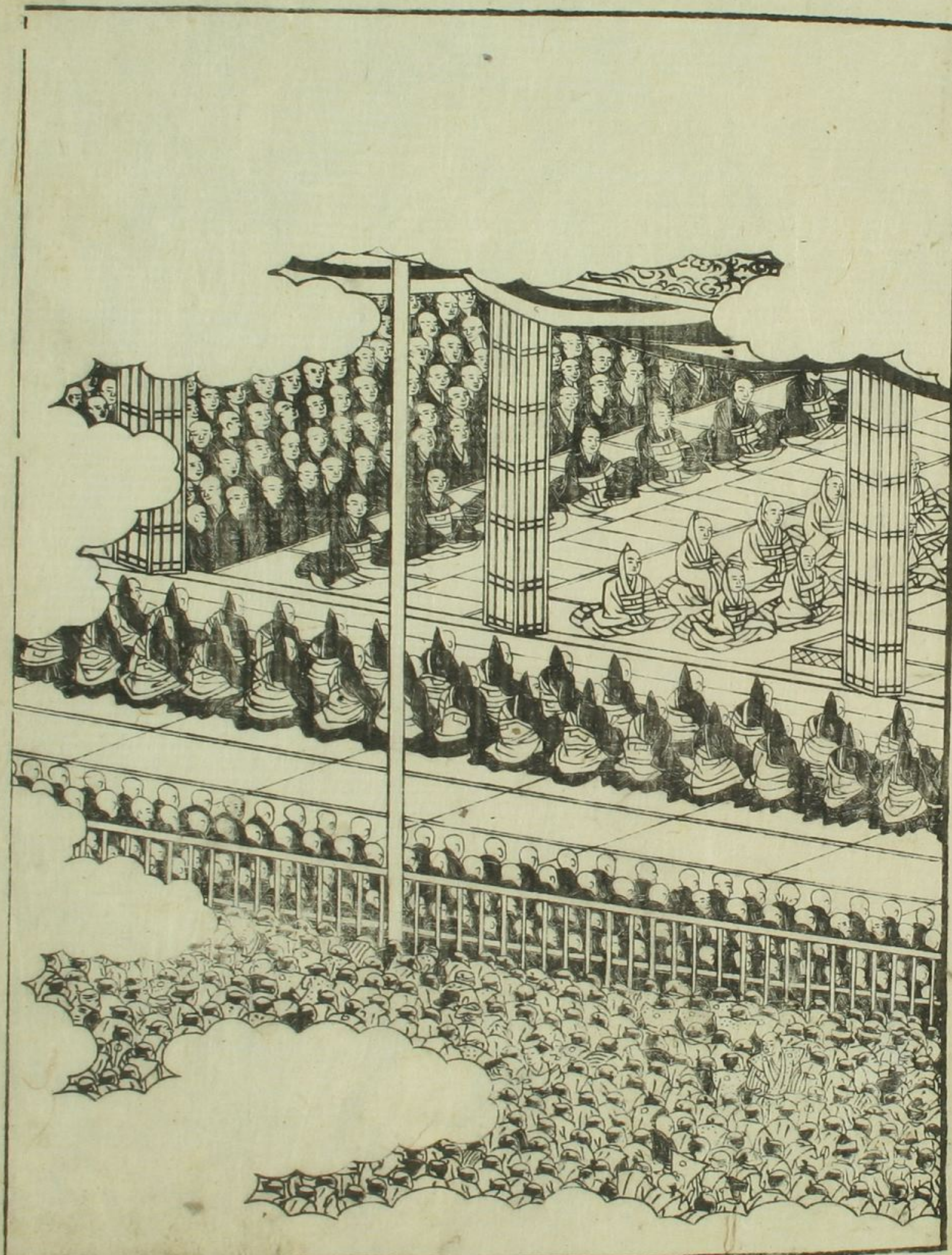
浅草
東の
御坊
表門



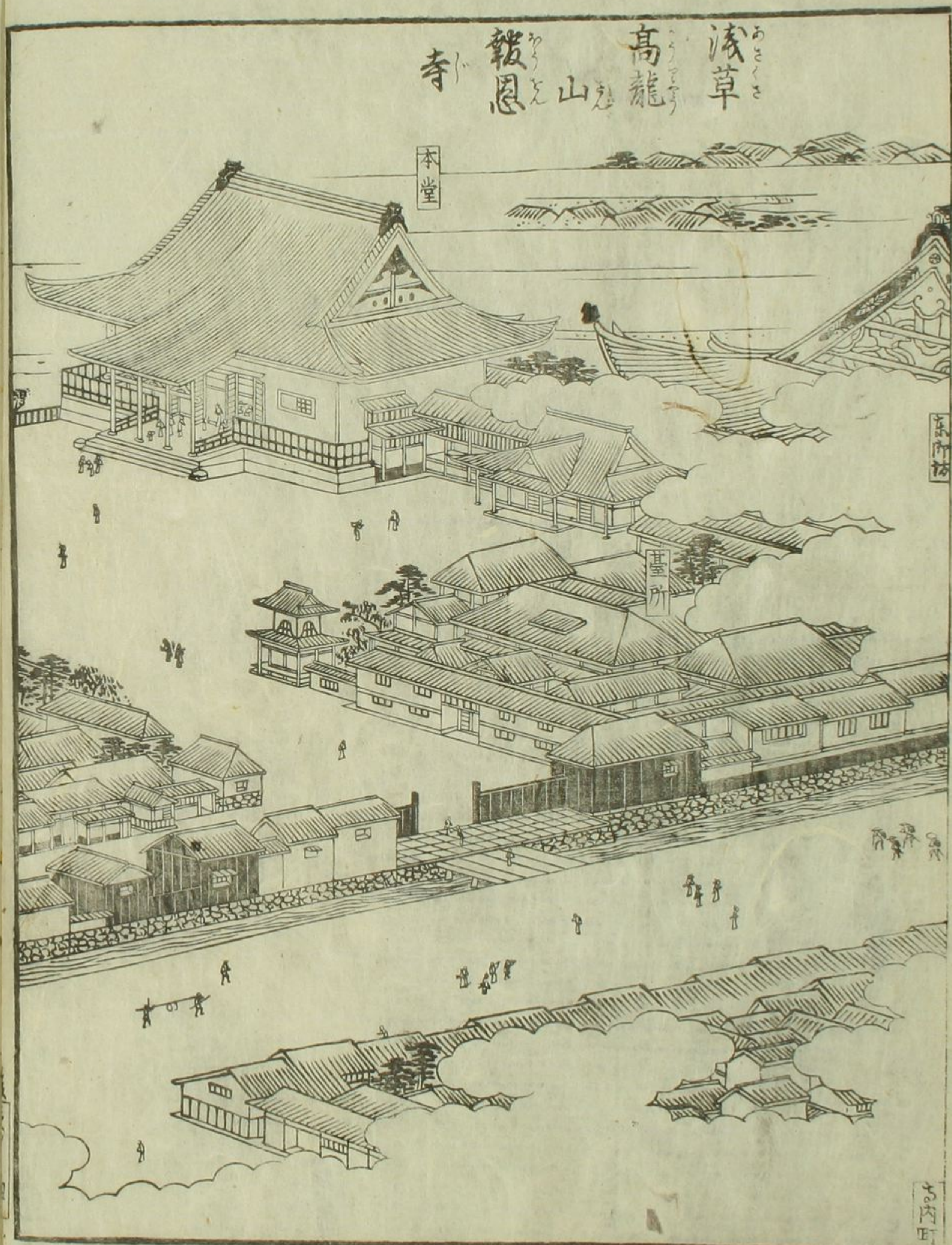
門の内坊舎三十六ヶ有る。御門至参府向うせ給ふ時
 の先遣御坊又御着到り門く御登 城成し給ふ其
 御格式最地又給勝せり
 或は高家乃河館へ河巡系上増上寺多御佛治之は
 其後の警固非常と禁し之殿重之報恩講御引上御法事
 又も本堂内陣の莊嚴整潔し御門至出仕あり
 せ給ひ院家御連枝の位侶内陣の左右に列座し御堂
 衆列座の僧達の外陣又附座して誦經勤行し給ふ
 衆僧数百人結界の内又系勤み其外松殿重しり
 府内近道の道俗の勿論都て関八州の諸人系詣群集
 多く大堂又満ち廣に充満せり
 其外高家大家並参り後者の出入口並に車馬と連杯

浅草
御坊





ど
み
の
つ
河
大
法
事
之
圖



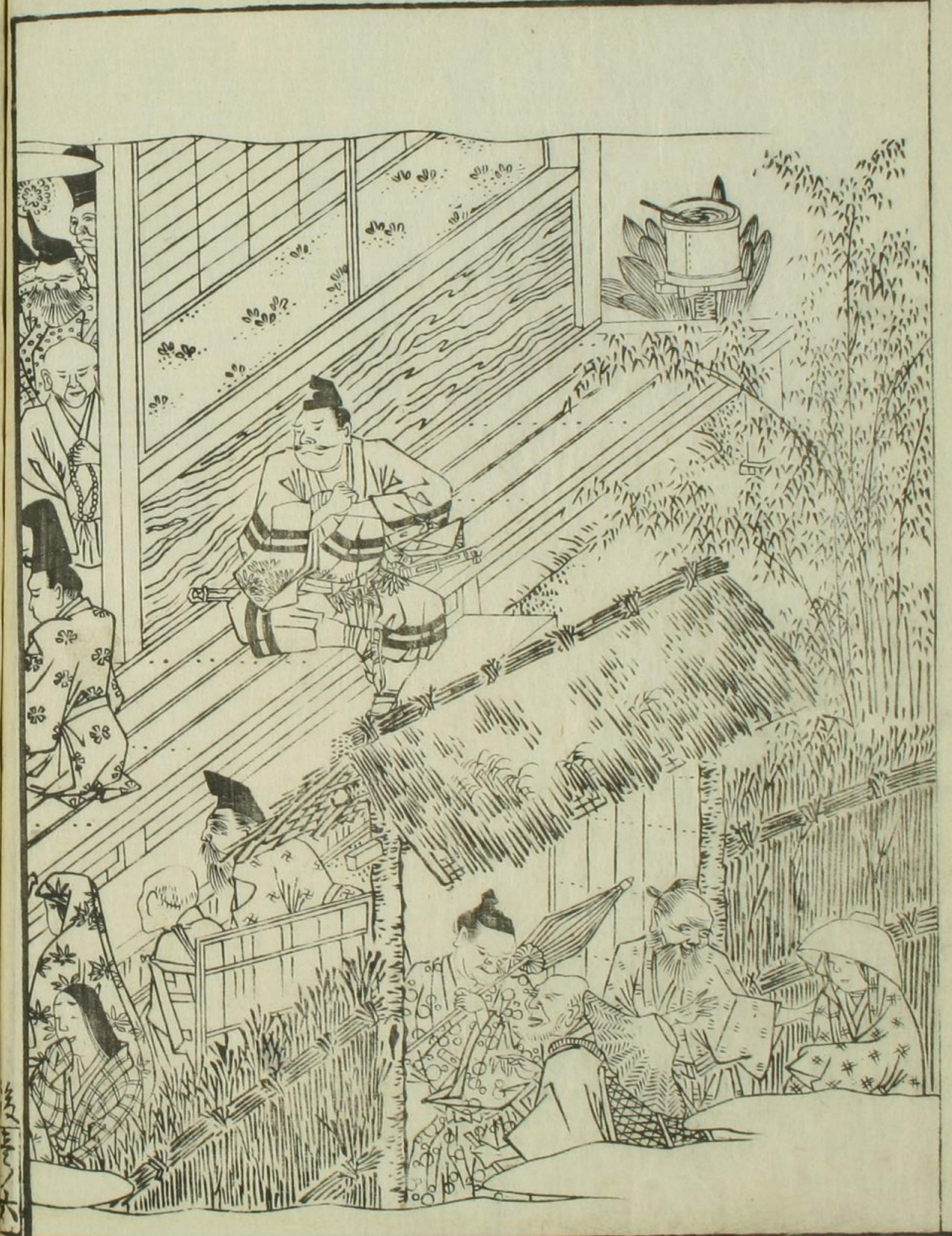
獻上乃音物さるがう堂中又山を築がごとく

高龍山穀恩寺 東流 洗家 日所あり

謝徳院と稱ひ本堂十二間に面塔中十三坊を子堂○開山
の性信上人なり抑當院の高祖聖人上足乃沖牙子二十に輩
第一飯沼性信上人の造達也性信上人俗姓の大中長常州藤
崎郡の人なり幼名ハ悪又郎と号べり 後子に即 大力又双勇猛
強勢にして心性狼戾也曾て礼法を不拘順讓の心なき荒若なり
るが元久二年の春年十八歳より諸國を若修妙と志
し國を巡りせしゆさくして紀州徳神權現又清みで
るふ其入ると都より適東山吉水に系流と其以法
化上人吉水の禪坊に於て本教他力の妙要を説せり是孫

陀那世の悲教と云ふ十悪の凡夫又逆の衆人も捨てて
敵い終るとの誓ひをわんが惡逆の心を願ひひと人
如素の惡教を信しなり一念稱名念佛と云ふ改定し
て彼國に往せんとす又又疑ひあぐるはとてよくと教
化しつせ終る徳圓の美徳道信門前に市とあり 雜と云
ふ死なりはし与に即振端に在り徳圓はるが若智乃若
因今又又於此しや大師上人の教化ひしくと胸又若
そと終る難有るとありたれは發露淨土にまがると人乃沖
若に出教自ら曰く我の東國常陸の若くて年来の事ある
にて物の命を殺し人を惱し惡逆の業に佛法徳
圓の今日が始なり終るふは衆源き我亦たなりとも
孫陀乃大惡とて救いせ終るとり冲教化衆源き我亦たなりとも

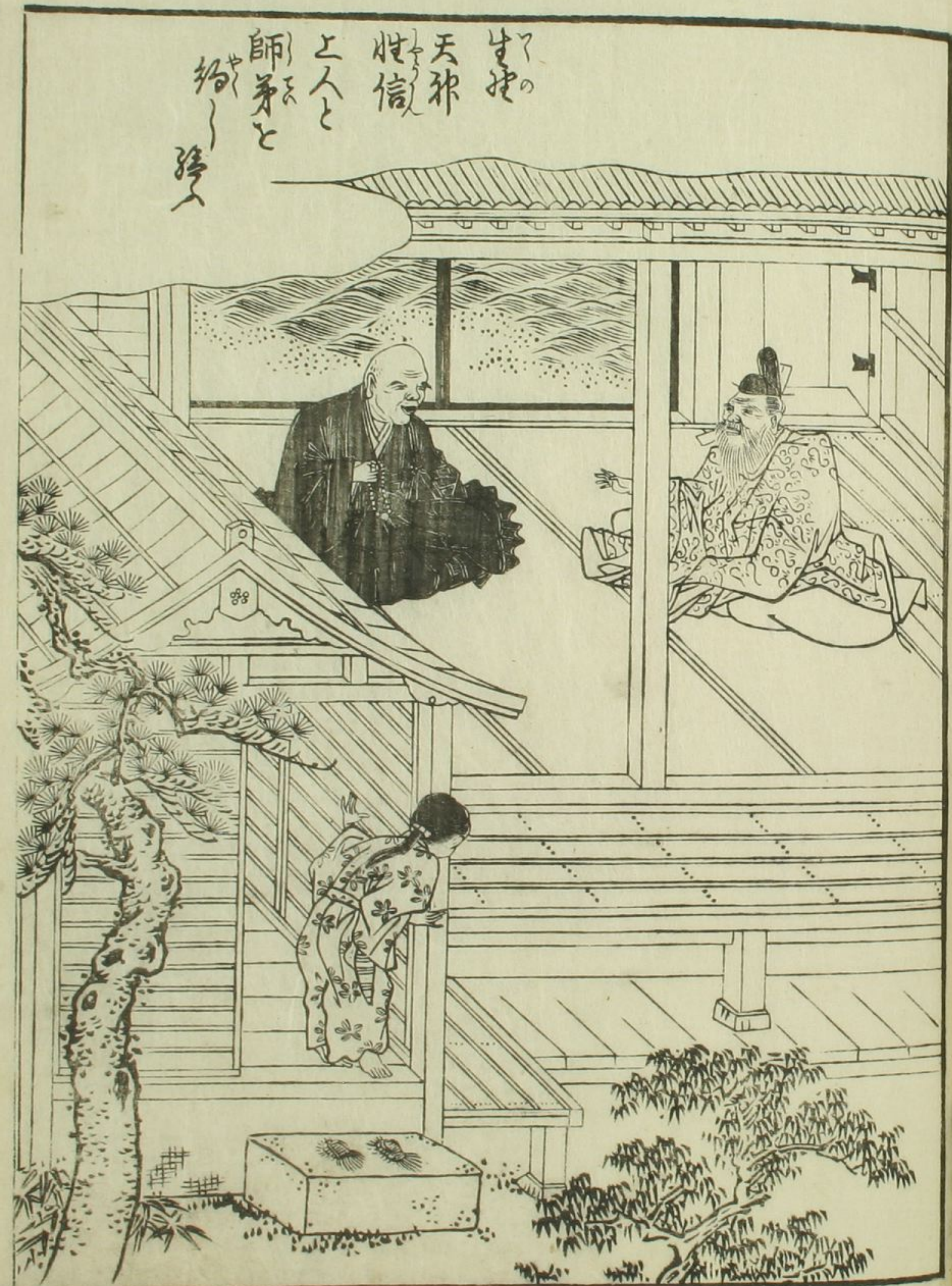
法持上人
吾水の菴
法を説く人



信(ま)へ阿(あ)いさ教(きょう)りくハ沖(おき)子(こ)とあしてくハ悪(あく)人(にん)をも
化(け)奪(だつ)じ終(しゆ)りれじと其(ま)後(ご)誓(ちか)と代(しろ)く堅(か)固(こ)乃(の)信(しん)者(者)と
如(ごと)くに法(ほふ)統(とう)上人(上人)とに即(すなは)ち實(まこと)ある志(こころざし)を感(かん)じ終(しゆ)ひ極(ごく)
世(よ)に殊(こと)勝(かた)なる若(わか)者(者)多(おほ)く又(また)若(わか)信(しん)坊(ぼう)渠(け)を沖(おき)坊(ぼう)乃(の)才(さい)
子(こ)又(また)は終(しゆ)じ終(しゆ)く教(きょう)化(か)とばし終(しゆ)るハ老(らう)年(ねん)乃(の)源(げん)室(しつ)相(あ)い
後(ご)へともいくむくの年(ねん)々(々)終(しゆ)りせん沖(おき)坊(ぼう)いさぎ年(ねん)若(わか)し
ゆくとも弘(くわ)法(ほふ)乃(の)力(ちから)又(また)もあづきも乃(の)ならんとのたまひて
聖(せい)人(にん)の沖(おき)才(さい)子(こ)又(また)場(ば)りたる 大(だい)所(しよ)上人(上人)はまに即(すなは)ち祖(そ)聖(せい)人(にん)ハ沖(おき)属(ぞく)終(しゆ)る
人(にん)五(ご)二(に)の沖(おき)才(さい)子(こ)とあり名(な)終(しゆ)終(しゆ)仕(し)して開(ひら)き沖(おき)乃(の)あつたや果(は)して後(ご)年(ねん)聖(せい)
たどけとも終(しゆ)るとるんハ沖(おき)聖(せい)人(にん)沖(おき)年(ねん)三(さん)十(じゆ)に歳(さい)まに即(すなは)ち年(ねん)十(じゆ)八(はち)歳(さい) 高(たか)祖(そ)若(わか)信(しん)
聖(せい)人(にん)とに即(すなは)ち對(たい)し重(おも)く他(た)力(ちから)往(むか)生(せい)乃(の)有(あ)終(しゆ)と福(ふく)んごらよ
瓜(うり)し終(しゆ)ひ則(すなは)ち法(ほふ)名(な)と性(じやう)信(しん)と号(ごう)け終(しゆ)ひぬ是(こゝろ)よりしと性(じやう)信(しん)
坊(ぼう)聖(せい)人(にん)又(また)常(じやう)終(しゆ)して惜(おぼ)も沖(おき)側(がは)と放(はな)たてまらるハ既(すで)に配(はい)所(しよ)へ

終(しゆ)き終(しゆ)る沖(おき)才(さい)子(こ)又(また)場(ば)東(とう)へ五(ご)城(じやう)稻(いな)田(でん)又(また)居(ゐ)る占(せん)り終(しゆ)る又(また)常(じやう)二(に)沖(おき)
才(さい)子(こ)又(また)沖(おき)才(さい)子(こ)とされたるが其(その)以(も)ち建(けん)保(ぽ)二(に)年(ねん)聖(せい)人(にん)下(げ)終(しゆ)
國(こく)へ終(しゆ)て沖(おき)化(か)益(えき)まじくたる沖(おき)當(たう)國(こく)終(しゆ)田(でん)の庄(ぢやう)横(よこ)曾(そ)根(ね)郷(ごう)
中(ちゆう)又(また)大(だい)寺(じ)あり年(ねん)久(く)後(ご)每(まい)恒(こゝろ)とあり朽(く)坂(さか)の古(こ)院(いん)しと每(まい)
誰(たれ)ハ終(しゆ)造(ぞう)を加(か)へるものや終(しゆ)生(せい)ひうさなり終(しゆ)終(しゆ)終(しゆ)終(しゆ)乃(の)栖(せ)
とばありぬ聖(せい)人(にん)は荒(あ)る伽(が)藍(らん)の瓦(わ)殿(でん)と乞(こ)得(とく)たまひ
性(じやう)信(しん)と愛(あい)又(また)恒(こゝろ)院(いん)うせしめ十字(じゆうじ)名(な)号(ごう)と書(か)して又(また)終(しゆ)ひ
是(こゝろ)を中(ちゆう)するに教(きょう)化(か)るはし終(しゆ)るはし性(じやう)信(しん)は寺(じ)と終(しゆ)
補(か)く恒(こゝろ)院(いん)に専(せん)ら真(ま)宗(しゆ)を弘(くわ)通(つう)せり 後(ご)年(ねん)同(どう)國(こく)大(だい)元(げん)二(に)年(ねん)
を祀(まつ)る以(も)ち龍(りゆう)宮(みや)寺(じ)也(なり)
建(けん)保(ぽ)二(に)年(ねん)より皇(すい)霜(しやう)十(じゆ)九(く)年(ねん)を經(へ)て聖(せい)人(にん)沖(おき)年(ねん)六(む)十(じゆ)歳(さい)
元(げん)永(えい)沖(おき)年(ねん)洛(らく)阿(あ)くせ終(しゆ)りんとく東(とう)國(こく)沖(おき)終(しゆ)是(こゝろ)乃(の)終(しゆ)
性(じやう)信(しん)坊(ぼう)ハ沖(おき)供(く)や登(のぼ)るはとるが既(すで)に相(あ)州(しゆう)若(わか)根(ね)山(さん)

又七聖人因東の方と詠り申り終ひ河洞を渡り柳の下の平久
 後関東にありて衆生と化養せしむるに偏執邪見乃族
 も念佛を信し今も化力往生の教法専ら仕人の係り
 降洛の後いふる妨げありて安心を乱し門系と迷し
 ぬらんと是のまゝ悲しくあふなりいふ小性信汝も年乃
 若より我も後引し化養を受る事既又三十年願
 真宗念佛の旨説く通ずり執く我も代り関東に留り
 門系乃後又弥陀力信心の者と弘通せば我も後終
 仕くしんより百倍の功なりと異く仰せらるしうい
 性信とてう此言をく洞よりあつてあつて性信如者を河
 茅子と思ふされしは重恒と命じ終るも生後世乃
 卒也よこそ侍人といつと只く是より河別とやまんの



何がう悪しくいゝと夜よるの神かみと教しよと押おしつてさうぐと教しよ
うまうが師うしの命いのち其その重おもきう泰たいふの丁ぢやう強つよて辞ことばせし
怒いかでか多おほし御ご名な張はりをくくつへとも仰おほせは珍めづひ東あづま國くによこ
まり化け蓋やくと能たしゆべと御ご受うけ中ちゆうよととまれば聖せい人にん結むすと
執とひたまひ性せい信しん東あづま國くに又また苗なまりいりありて親しん響きやうが自みづか教しよ
辱おとしめは又また異ことなりは東あづまの門かど系けい一いつ園えん又また御ご坊ぼく又また教しよけさむ
らふなりととく教しよく乃の什じつ物ぶつ御ご製せい化け乃の抄しやう教しよと附つ属ぞくに
せ給たまひしう性せい信しん謹ちんで先まを拜らい受うけ一いつ洞どうと終はつて聖せい人にん又また別べつ
是こゝ東あづま國くに一いつ向むかひり備そなへ性せい信しん坊ぼく下しも総そう園えん撰せん曾そう根こん又また久くり
尊たう佛ぶつ念ねん佛ぶつと弘くわん通つう多たくれば道だう俗じやく飯はん依い系けい集じふ門かど前まへに市いちと
る以もて又また抄しやうひと性せい信しん佛ぶつ園えんと建た立たいよく宗しゆ風ふうと壯さうん
又またせんとも其その地ちと求もとむる小こ幸さいなる哉いかでか飯はん沼ぬまとく廣ひろきは

あまは口くち方かた乃の系けい色しきを勝かちとよりと性せい信しんけは信しんと撰せんむり
教しよ十じふ町ちやう其その中ちゆう又また佛ぶつ園えんと管かん匠じやう都みやこ乃の聖せい人にんへも其その教しよと信しん
上かみらとこれハ聖せい人にん甚たつ御ご森しん院いんあ門かどて則すなは寺てら号ごうと報かう恩おん寺てらと
下しもし給たまひ性せい信しんけ佛ぶつ園えん又また抄しやうひて弘くわん教しよ真しん實じつの教しよ法ぽう尊そん念ねん佛ぶつ
名な乃の妙めう業ごうと説せつ弘くわん乃の給たまひ又また美み徳とく乃の信しん系けい信しん集じふ抄しやう依い
信しん仰おほせり聖せい人にんの此この地ち又また禮らいして教しよ辱おとしめらせたまた又
又また是こゝ乃の真しん宗しゆ乃の撰せん榮えい日にち又または壯さうん之のとひえたり
下総園撰曾根と造立
龍山報恩寺と号しと
○又また奇き異い乃の多たく乃の真しん永えい元げん年ねんの
其その性せい信しん上人じやうじんけ撰せん曾そう根こん乃の古こ院いん又また向むかひ登と夜や化け力りき念ねん佛ぶつと教しよ
化け小こしる信しん法ぽうがひ来きりて圃ひん法ぽう隆りゆう甚しんせり犹いる又また或ある夜や衣い
冠かんうるはしき老らう翁おう一人ひとり諸しよ人にん退たい教しよ乃の給たまひ抄しやうひ性せい信しん上人じやうじん
又また謂いて云いやういふ上人じやうじん乃のけ泥ぬの傍はた又また左さ右みぎの生せい理り天てん神しん

寺記曰
建保二年



方の師に地より来り弥陀乃本教を説悟し終ふより予も
日夜諸人より来り来て師の教法を傳へる是れいふ人
予幸之と歎び又終に自今予と弟子と如く終る予又
御身と師とをいひて我幸靈を祠廟の裡に崇めし
て又貌を現し奉るは今より已後の姿と現せんとて
諸位に於て毎歲正月には礼式として鯉魚二尾と鯉
を一尾を以て師弟の印と爲し假令三代を歴ても
變らざるみえりて此とて性信上人を拜し出たり終るに
是しが飛り幻りてく消て見えざるに性信坊奇異の事
よとて是を以て人より語りて後日の音信を待たざる
猶も小其翌天福元年正月十日の夜の事なりしが
生れ天神の社人以下六人日夜不思議の靈を以て

夢りたる其横に天神彼を告て曰く横曾根性信上人の
海度利生乃聖者なり予師弟の約と結ぶべきは
師を以て敬するの徳又嘉陽の嘉物としてけ社みえり
今年と始り毎歲定例として鯉魚二枚と性信上人へ送るべ
き之明日御洗乃池に細くして鯉魚を獲て横曾根へ
く献じしに努めける遠くはと若しひたり靈若
を夢りし社人等六人同善と感し吾思感乃と云ふと如
里人より語りてせし神勅炳焉と云ふ事閑よと云ふに
彼御洗乃池の中へ細く入るは善想又遠くは忽其長二
尺の鯉二枚と獲りて横に天神の身と遠くしとけ鯉兩頭と併に入
社人多く相傳ひ性信上人の御坊へ持来し神勅異
と委しく演説し是は性信上人にせし御洗乃池に



場りのうる布先よけ約諾と蒙りし事あり是偏又聖人の
衝勅化普く濁世末代よむ門く利物偏増く終ふを
終るん思凡の我牙何として神の師範とみんる思
ふき小あつびとく人も神意の源くはしませば解せん
るうくよ思ありさればこれより後沖契約よ終ひ師
弟の禮を受るべきこと彼經典と受納ありと人より
獲餅と一重の經典と入来りし屏よ納め天神捧げなると
送りぬさせ終ひたり是と礼儀の記と今今既又星雲
を獲るるや六百年一とせも欠るるや毎正月沖を洗
の池細と入は長二尺の經典二載被細よりくらん
はし是正安神の然らしめ終ふと云くも難あり即
け經典と屏よ入社人里人これと守護し今の報恩寺へ送

載に報恩寺これと納め例のおとく經典を入来りし屏(性
信上人の本像に具へて於獲餅一重を入れて屏し其
生れてけ獲餅と天神の禮よ七日傳へたり其後
細よとけしと氏子の者へ与へ侍るとぞ又報恩寺よは
け經典二尾ともよ上人の本像へ傳へ最後是とよかよきり
く系諸の諸人よ与ふり寺例也

○報恩寺百有余年以若多契若ガ妨難よ門く江戸藩政へ引張
り撰者根飯沼の古流の圓光寺と号けて今よ兼常とあり
性信上人の本像に撰者根圓光寺よあがたよ右天神の中より
載よの經典と本像に傳へくまより江戸府報恩寺へ送りきよ
正月十六日け經典を刻て系諸よかつと經用きよと經刻と
て江戸中の門系群集し奉りて刻肉を受る凡六百年の今
武綱のふりよまこと小敷いられ異靈世こそ門くこれを
とす

○生建の天神の社より鯉魚と性信上人は献じたる後かの
 社の若なり御衣洗乃池の辺りは板の樹ありけ板の下へ
 毎朝曉天は濡しく衣冠をうけおる門て鞍恩寺の方
 に向ひ暫く礼拝して去るの時より数年を歴より
 社人始りの程に心も付ざりしが門より見詰めて懐しと思
 ひ悲びやうふ泣に付て歸る所を見とこれに彼翁天神の
 社擅と押開き入ると見ると矢張りぬ社人夫と恐もて
 是まぐるくりぬき神衾の性信上人と拜し終る也
 とくけ板は浪連を結ひ也し礼拝板と号し又伏拜と
 稱し今又出家の事なる

○傳説は曰く延宝六年の春天神の別當大生寺病死せし
 が其の後僧の傍に強はし鞍恩寺へ鯉魚と送るなり奉寺と奉寺
 この作法は似たりけ後止るんとくは例は背き洞進の後なり

礼拝板



これに憐れむ彼僧の癡病所故に懐疑のどくそを以て遠くつひ
かく心亂るし尤も心月下旬を石の名を内記とる者希く
右右清門天祥の靈告を蒙りたるの四例のどくを湯乃嘉武報
恩寺の上人又歎進とて天福の昔より一とせしを以て我師へ
僧を嘉抱るる小童年始て是と聞て我心は叶いど友に別當を以
て記せんと欲しそやく難敷と歎せんとんは汝等も撰雅遊る
るうらびと堪り乃漸夢を告げんとくく善いそより五人
大に驚き別當大生寺まで彼人里人多波し合せそ夜漸に
洗の池に納しこれに始しうがてく二尾の鯉をたたり其後舊
例にまらせ報恩寺へ送り定例調ひこれに別當乃病ひ忽に
死し満人いよく天祥の靈異高祖聖人性信上人乃高德を
母とせし其の後歎經の礼式をいよくお勸るるの事なり

○性信上人貞承元年より下総國撰曾根報恩寺を母して
真宗念佛弘教し終ふに遠近の道信傳依系集し聞法

陸路に他方往生の宗法をら仕ん之就中其徳の功數あり
し七種くの奇特多うりたる建長二年の秋善想の感あり
一人の化僧きうりて性信上人に告て曰く奥州信ま郡
去湯山に依り生乃背あり又根一株の松を去るしと
せりと性信善是めくそらく我年以奥州と化奪せんと
そよ志あり是必し因縁の引く不るんと既も奥州に根云
湯山に依り生乃求むるも深しと一つの塚ありて又根一株の
松あり性信是と穿ち掘れれば白骨既然しう善想の
遠いさるるの事が因縁の地たるを以て是を去るしと
復も一寺と營し念佛門を弘通とせしと一寺と造立し
法得寺と号せしめ此ら專修念佛の弘通あるる
先徳寺と名く性信建長文承よりうに寺と造立せし不備相州
うまらうの法得寺上総國藤原法得寺下総國筑前法得寺今法得寺なり

○此の證

世信上人
云陽山
菴の
背を
捨人



智法丘尼とく信心堅固の禪尼あり性信上人の高祖聖人の
御弟子よりしぐ心えの以性信と人自像を造り是と性智
尼又附属し報恩寺の住侶と傳り夫より十有余年して建治
元年し壬午年性信上人幼年八十九歳七月十七日念佛
三昧に候して大往生を成し終ふ○報恩寺教百年お續し
二子余石の飲地ありし又多賀谷とまとのみ若し不飲地と押
飲せんと候く妨悪と為しかど小寺をけし府清堂へ引りて
靈跡とお續し撰曾根の舊地を圓光寺と号するゆゑに委く
若しと入りけり今撰曾根の古跡を報恩寺村と号く
二子石の飲地は多賀谷と集ま今武家の不飲と如きなり
性信
天休

圓光寺の祀り後
建下徳の郡に在

宗祖親鸞聖人真像

報恩寺第一の靈像之平寺在りの撰より壬午の御聖人
六十三歳御自他の親像よりて今又圓光寺に在りて

○性信上人嘉禎元年のまゝと浴あつて祖聖人又湯へ入れば東國と仰ひて宗法は
又聖人又門弟月々増進し信心堅固のゆゑに彌増ふ多きは言上りて
聖人用ひて石をたれを平賀は瀧のより河をたれを又妙と評すはかきりて平賀
性信教日漸家の後か團一隊りて其性信と評すはかきりて平賀
別と名せり世々く國のまゝ論りて其性信と評すはかきりて平賀
御自他の親像よりて今又圓光寺に在りて
下向して何れせん然るもつていよく教化せりて終ふと云へば性信
今の澄方より衣の被成候りていよく教化せりて終ふと云へば性信
此の御い念者定離りて遠波の境取らるれば形をたれを又妙と評すはかきりて平賀
乃る小御自像と評すはかきりて性信と評すはかきりて平賀
性信と評すはかきりて性信と評すはかきりて平賀
又珠粒をおかきりて性信と評すはかきりて平賀
御自他の親像よりて今又圓光寺に在りて

靈宝不問教の信證二卷

宗祖聖人御制地内
自性性信上人御自像

九字名號

信心親法の名号よりたれなり

十字名号

宗祖聖人の御自像
報恩寺圓光寺の御自像

御繪傳に卷

傳文中山崎三世之如上人御自像
画ハ康樂寺より二代御自像

佛舍利

雷祥寺より聖人
法光上人の御自像

三部經

弘法大師
御自像

九條御製法衣

若道寺大師御自像
唐畫

法苑

法苑

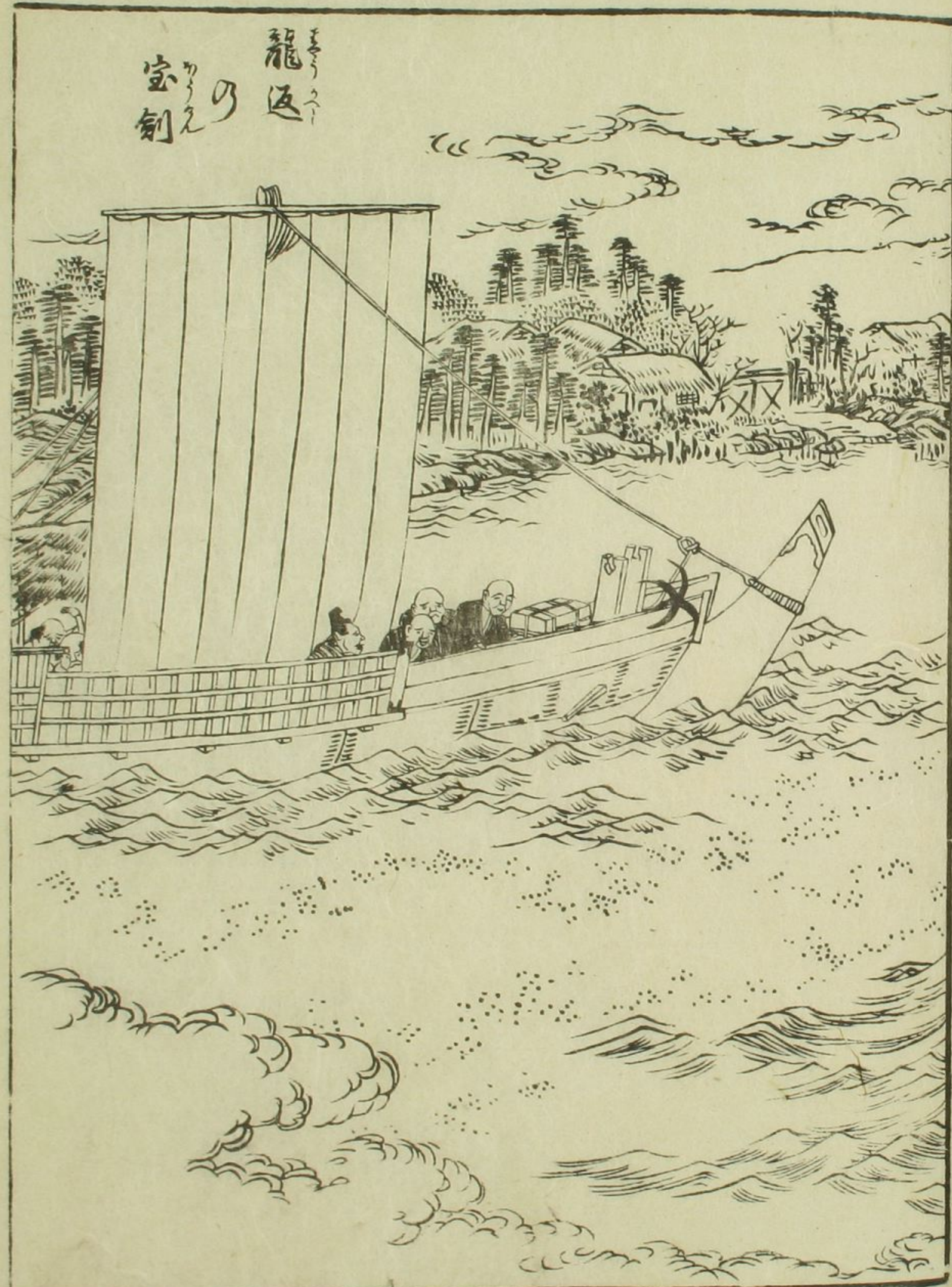
人御親

御自像

以上は品法地上人より親鸞聖人の御附屬

二十日集

龍返の宝剣



詔一壯如信上人。天神名号る朝親王。六字名号法光上人。六字名号河守。〇六字名号龍返寶叔

号蓮如上人。〇六字名号後陽成院。六字名号私法大師。〇龍返寶叔河守

〇又高祖聖人より性信上人へ河附屬の什宝光のごと

〇高祖聖人後箱根して河別より河守の中へ移るの巻物。聖人河珠叔河守の巻物と納めて性信上人へ授け給ふ

〇河園扇。河刀名地あり。〇河巾名地あり。〇河巾名地あり

〇聖人河真年性信上人へ河附屬

の河書二通。聖人河石持の河茶へ。松風河茶磨聖人の

〇龍返の宝叔長六寸。寺説曰高祖聖人より性信上人へ附屬

の宝刀也性信上人麻呂明神へ信と伝ふる霞が浦三又の

河守と伝ふて河守は又風波雲と化し雷電鳴るるりき

河守と伝ふて河守は又風波雲と化し雷電鳴るるりき

河守と伝ふて河守は又風波雲と化し雷電鳴るるりき

は性信上人と伝ふるは我懐中の宝叔と龍神得まく欲

と伝ふる人即け宝叔を水中へ投じ給ふと忽雲晴風

収りて船も難く若岸せり然る小川の船中又け三又と

河守と伝ふと忽龍形をとりし上は彼宝叔と我て船渡

来り性信上人と是と捧げたる性信希代の身よりで給ひ龍

返の宝叔と号け給ふとぞ

〇武記曰武者修好乃士あり鞍恩寺の門前居睡りし

飯沼より悪龍取て来り彼者と吾人と及干時士の懐中より

短劍飛出るとこれを防ぐ悪龍思ふと水中へ逃去りぬ性信

門内よりこれと伺ひ見つけ劍を不承し竟り飯沼より

入る悪龍を逐出せり悪龍はけと身を遁去りて常州

三又の水中へ強き位心其後性信上人の息女流智比

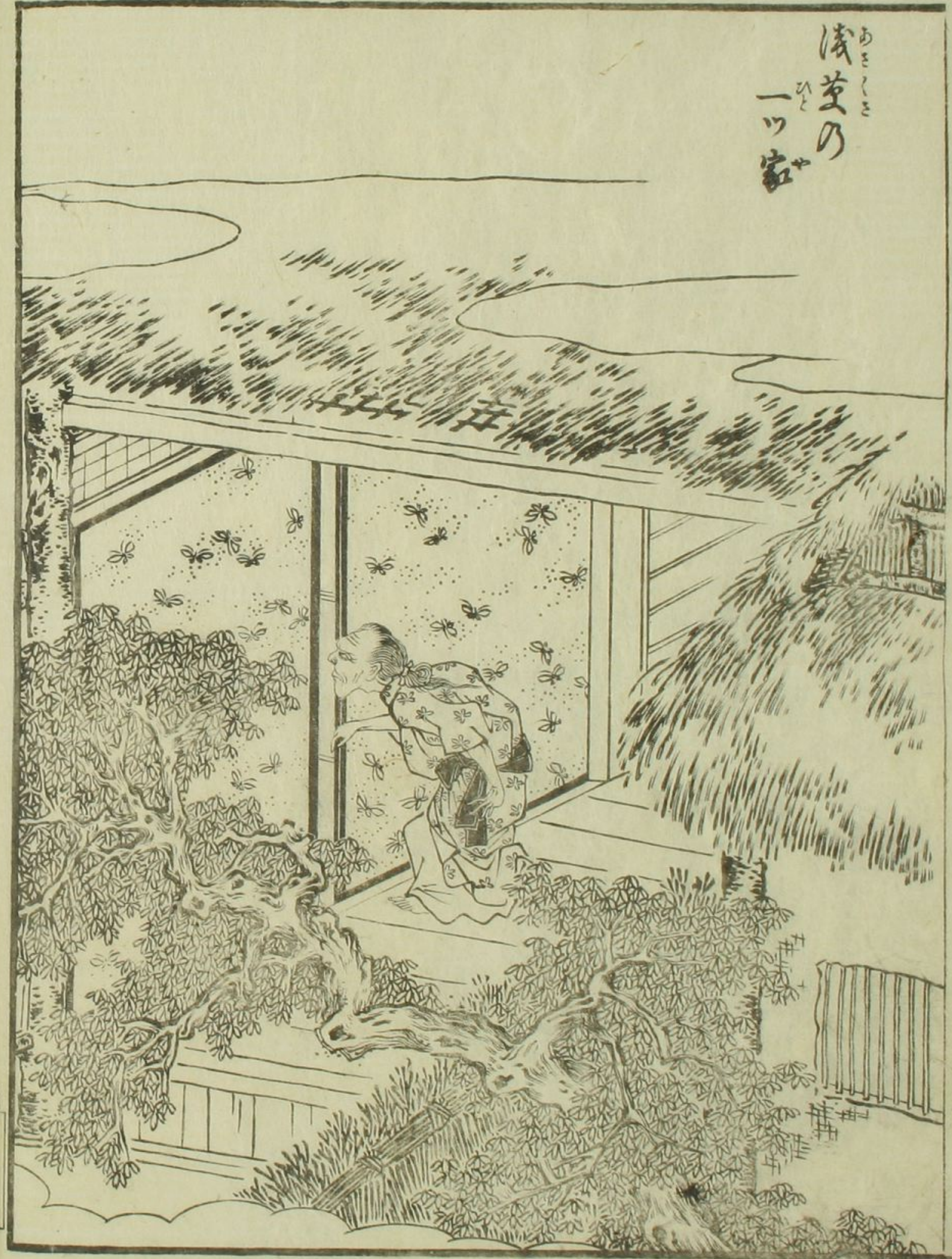
丘尼くによは細つとと懐なごはして被か三さん又またを涉わたりけるは船腕ふねうで又また西にし後ごらんとい
えりつ小尼おのの懐中なごちゆうより細つとをのづくとこ飛出とびだして水みづ窟くわ又また飛入とびい率すう
然しかりしは松まつ去さりたりは尼あま海うみのさ小再おのまたびけりはて龍りゆう蛇じや改か上じやう
細つとと裁さい来きたり尼あま又また返かへりは又また細つとの名なといはとき 云い 嵩たか尼あま何なににはあ
る古ふる佛ぶつをしり 野の野の 野の

○金龍山きんりゆうざん法華寺ほっけあまをの修しゆ那な法華ほっけ草そうあり本ほんより心こころ親おや者もの坊舎ぼうしやに十一じゅういち區く入い
重ちゆう宝ほう塔たつあり推おし古ふる天皇てんわうの御み宇う尚じやう寺てい安あん創そう成じやう 云い 朱しゆ雀さく院いん天てん堂だう又また平へい
平へい云い 雅みやびといふ人ひと或ある飛と園えん因いんより 附つ尚じやう寺てい親おや母ぼ者ものの靈たま異いと感かんじなり
信しん仰やうの余あまり七しち堂だう伽か藍らんを造ぞう造ぞう 田でん園えん教きやう多た附つせらるるはなり
以も未み歷り代だい ね軍ぐん家けより修しゆ造ぞうの儀ぎ儀ぎ修しゆの儀ぎ儀ぎ附つ屬じやく 修しゆ
毎月毎月十八じゅうはち日にち親おや世よ者ものの縁えん日にちの儀ぎ儀ぎ修しゆの儀ぎ儀ぎ集じふとるはなり 抄しやう比ひに都と身み
一いち乃の親おや花はな幸しやう朝あさ五ご叔じふの靈たま場じやう
○法華の東とうに明めい王わう院いんとる寺ていあり 姥うばヶ池いけといふ名なの僧そう若じやくは法ほつ造ぞう
人の修しゆる家け居いりしは法ほつ造ぞうの儀ぎ儀ぎ修しゆの儀ぎ儀ぎ附つ屬じやくの儀ぎ儀ぎ修しゆの儀ぎ儀ぎ附つ屬じやくの儀ぎ儀ぎ修しゆ
一いち乃の親おや花はな幸しやう朝あさ五ご叔じふの靈たま場じやう 女めづと只ただ二人ふたり修しゆるはなり 抄しやう比ひに法ほつ

恐おそき姫ひめとて修しゆるは人ひとを止とどめ石いし乃のまうりしはなり 抄しやう比ひに法ほつ造ぞう
よく修しゆるは人ひとを止とどめ石いし乃のまうりしはなり 抄しやう比ひに法ほつ造ぞう
衣いの儀ぎ儀ぎ修しゆの儀ぎ儀ぎ附つ屬じやくの儀ぎ儀ぎ修しゆの儀ぎ儀ぎ附つ屬じやくの儀ぎ儀ぎ修しゆ
おの儀ぎ儀ぎ修しゆの儀ぎ儀ぎ附つ屬じやくの儀ぎ儀ぎ修しゆの儀ぎ儀ぎ附つ屬じやくの儀ぎ儀ぎ修しゆ
一いち乃の親おや花はな幸しやう朝あさ五ご叔じふの靈たま場じやう 女めづと只ただ二人ふたり修しゆるはなり 抄しやう比ひに法ほつ



浅草の
一ツ家



ぬるる相しも彼老婆の横る悪業の己が身又報ひ来るるもあらず
しゝく旅人とみれごとく押ころしゝく材室衣敷を奪ふるや
かどしゝら大経明天皇の御宇三月十日とうや年乃辰二ハ斗
乃其かうら藤一き兜一人唐織の衣と着るまゝい乃袴をつけけ
一ツ家より宿をとりしむ波母これと見と心乃内よりくびは終に
刺来いくむくの旅人と止らぬこと布の衣麻乃袴の外くるも
まぬぬの袴とぬらたしむるゝいなる様分のうぐり来くは雅児
の只一人波母が唇をまきりたるやと名よりし緒にりてはし己が娘と出
て終はせしめりけ女年いまご十五の表袂と纏てうる人を掃々
三ツ家に生えぬこと岩本よりぬ人同乃赤ういけいのあて
かる顔優まふびりうらうこまのやせしことより母ぶまのいこ
かすし路もふて衣のそ坂乃うまけうまう独り押ひは沈と
まこれん

ぞいぬ心よりねえたらて涙のちるはこい後ありき
と係し秋の心をなやううん小疾変るはけ女推思う所戸の型ひとて
あひぬらんみの若やへとふまうせうはうや命のをううじ
ませ終へとゆりさせははけ方もととが袖ぬとくいなまうらじ福妻
の老母待るの誓りそと石の枕とりうともまはしは髪と結ひたる

老婆のやけあつのみもまうらひ今い雅児もうくつぬらんお
ころしゝく衣敷を刺んと例またがま尻大石を兜乃所方枕乃
とへ情もも押落し紙燭とまうまうりまればありし雅児は何地
外一やかげもえんいとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしと
恥居ううの涙はし何としてうけなに神居てけあまうはあうら
そやまうそも雅児と道せしとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしと
の涙とせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしと
外の方うけ出履をうきまけしとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしと
らぬよくてス家の内へまう入度しき女が記憶と抱とげ憂鬱たりたる
み乃采や未だまねぬ老がぬらびん乃いのらをらうめ奪ひ
焼へ材室の娘ひとり乃料るるぞや今い中く焼とぬりぬれうま
しとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしと
ぬ例と神しとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしと
雷と布りし雅児乃心あも恥と出海悪妙と積り須弥よりし
るく羅業の添きまう滄海も尚及ば女の羅業は死にうるも如
素乃方便我こそ涙を寺乃親世をたりと若死い念念との菩薩
と化し西の方へとびさうたまふおとらきとあまを愛せうらみごを
とせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしとせしと

正の忽一念後配て奉来我多に殺せし旅人乃死骸の家傍る
池の底へ沈めりしが娘を乞養せし又池へ葬そのまきりや
くく二人の霊魂とあり食と鬪り二十日余り後池の中へ水と投ぐ
水の空へ入て終りたりされば後人婆が志と表さし池の側
祠と建又二ツの寺院と造立し母子と後人の乞食所吊ひたり
と武蔵守は荒るる押守とはつひ修人ぬ白河院の御製よ

いとし理の霞が園やいと内やの石の枕や押守あり
かくも縁下終ひしうぢたもりのわづらうてつうへのおまも押り
えううとぬ今の明王院の被押守乃後たりとや

○東叡山寛永寺園地院の二押守は元人皇百九代後水尾院
の押守寛永年中慈眼大伴兼判乃霊場たり天倉ありて寺中
の坊舎三十一ヶ寺あり

御廟と徳らなり寺院一乃石堂の庄嚴珠王とらりなち天下
の霊聖方り

○浅草寺恒退部と丸の外の都樓とあり其間の境と日本
境とあり大門は衣紋坂ありけ都へつうふかのといは大門は
我ち衣紋坂つて深い坂きりて極若くまも衣紋坂は
坂の名あり女のくえてかた世りせば衣紋坂なりといふも

長つたり人のけりしと吉田の蓋好うつら宣之と号へんる

○隅田川の府第一の大河なり一名浅草川ともいふ
物語よ

武蔵とまりよその國の中より大なる川ありと隅田川といふ
其河のわたりはむさかむさかひやとぎらうくまきりうら
とまびあふふまじし守りぬのれ目とれぬといふのうら
まうらんとまふまふ人物まじくして京よあふ人なれやも
あつたさうむしれ白きまのまじしとけりといふは鴨のま
まらうらあの人よはまびつ魚城ふ京よはまぬさうらさ
まふ人見まはれまじしりり同くはるん都とらりといふは
まら名あり抄りいといとらん都多我あふ人ありやはしやと
とよりのまらぬまらぬとらりてまらぬまらぬ

かくまらぬまらぬへり武蔵下総の國境と流るる川とまらぬ
今け川とまらぬまらぬ移り西國橋とらりも境乃川なれが
今隅田川の東葛西郡武蔵の地とありてと西國よりまらぬ
流る利根川とまらぬて武蔵下総の境といふまらぬ

隅田川の岸のわたりは梅若乃極平の柳 鏡の池、本如寺



信夫の返を
梅若丸を
擲る

あり鏡ヶ池のつらりを流芽が承とつり梅若丸の事流末洋
 謡曲ありいり戯場文の狂言綺語はして其名をくわす
 傳ふるもつらも其心くき流はゆいり末は或人の曰梅若丸
 人皇六十二代村上天皇乃御宇吾田少御維房朝長といひ人の
 云達たりけし少御維房和隆の群書よりい流く通し詩を
 宣後よまこ妙なり妻女はさとも子なく其妻柳乃局
 う腹は一男子あり梅若丸と名づく維房の妻若菜の若心流く
 柳の方乃翁せらうくと流くも其子松若が世嗣とらんを
 眼といふ小見く失いむと憂夜心は謀斗とみくつ流るは
 少おの帝の勅命より流奥國の候にまうると下向せ
 るるをて道にわく流上の里にやわしけけ石の松若丸と名
 えり小ちぎりをこら一人の男と名せり是を梅若と名
 若菜乃方心中いよく懐り流むとらんも父は
 出さ流して若丸を梅若丸の娘と名せしと柳の局ををて
 松若丸といひ梅若丸に世と嗣せやると欺きをれ心はつり柳の
 局を流るの方を中むははしうと流に心の女と名せり若菜
 の若けありとまとして心流ひまはく流る女は愛斗を
 進り松若丸と名りんとは柳區より柳の局かくて我が

花子乃方
隅田川よ
吟ひ奉る



よと再び杖退きて丁と下けたまふ二三十枚オタタの長回焦
 勢運繩の呵嘯もかくやと痛き川と流れて野の人とあり
 何者もせよ母とまきものとは足敷とやうはしとて小舟よが
 と漕漕とばるを先と見く若君瓜切倒し流とも足じ
 て逃りたり里人やうくよ舟と漕せ洋よりうて梅若瓜
 とまぐよ方ハヒももやとまきてせんよんはし長きと限
 けりし流さぐよを流と川岸に煙と本乃柳とまのしは極
 流流んごろよ吊ひさうとそもぬの花子ハ梅若丸は別道しり
 悲しこの心ハ火胸と焦し今ハ心もそ流し物くるま
 都乃方と吟ひ出流川笑川舞ひさる隅田川の川岸よつこ
 てうろが一本乃柳の下に里人集り傍流流し女向の面白
 はしるをせね人私心も足登りていろり人の面白さや
 我も赤よ押ひさ乃ちくまのそと向んそまをたぐれ未
 ぼしりありあり心うらげなる御吊ひや竹をさうくと流流り里人
 の中よ雲津去即面返との若物舞ひのあたまとさう小若や
 死する少年の石塚の人よりさうやと人笑をさう杖のり命
 と流しけね花子始り流りと物語とはけ物舞ひをを流し
 柳若丸乃父の名ハば流りばや首返答てそれハ流の其流

父の若田乃少お我の梅若丸とて終つて入るる物程ひかゝりて其梅若丸とていふ是れ若くは淡はしやとて大池に其子と投す夢乃かゞり泣くる表とるりし次子之存障の傍に子孫いさめて汝た久雨眼と泣涙に泣く血をてけ赤のそい深くも幽魂得脱の種とはりて秋きととらふ其念ふ念佛回向せんことを激は母の恩とるりしと勤め終へば理は愛配とてこのの髪とをりし知名の亀秀とていふと以て妙亀真秀尼と号し淵田の川岸淡茅系ふかゝるる菴と繕ひに称三昧の初若となり厭穢飲淨のそひより外更に倦く又入りし或時妙亀尼世の戸を用き房の外面上り池あり我秋の懐裏よりぬくし是てとるうた世の勅諭の依てより穢土の迷例と離れ淨土の快樂と受んりかきんるき本居りゆめと降世の秋二首と經冊と書く池の邊りの松が枝に結び終はけ池へ必と洗り承くけ世とてより多し其秋よ

妻翠の調とそ人く史也方り迎の雲をまの下の下法
洗芳生をく白雲のなまもゆるんきく人の世の中

里人其志とてらまも其所又協と築き一箇の廟堂と營
まゝくんと妙亀とてひび尼の姿と寫世し池と鏡が池と

秘伝とて

天川山明後寺

淡草より三里
下蒲田あり

當寺ハ高祖聖人泚降洛の初頻と道俗の請しきりうる也
哲く此石より泚教化ありし芳趾也とぞ

○本堂なる阿弥陀佛。親鸞上人泚真像泚自他別。○聖

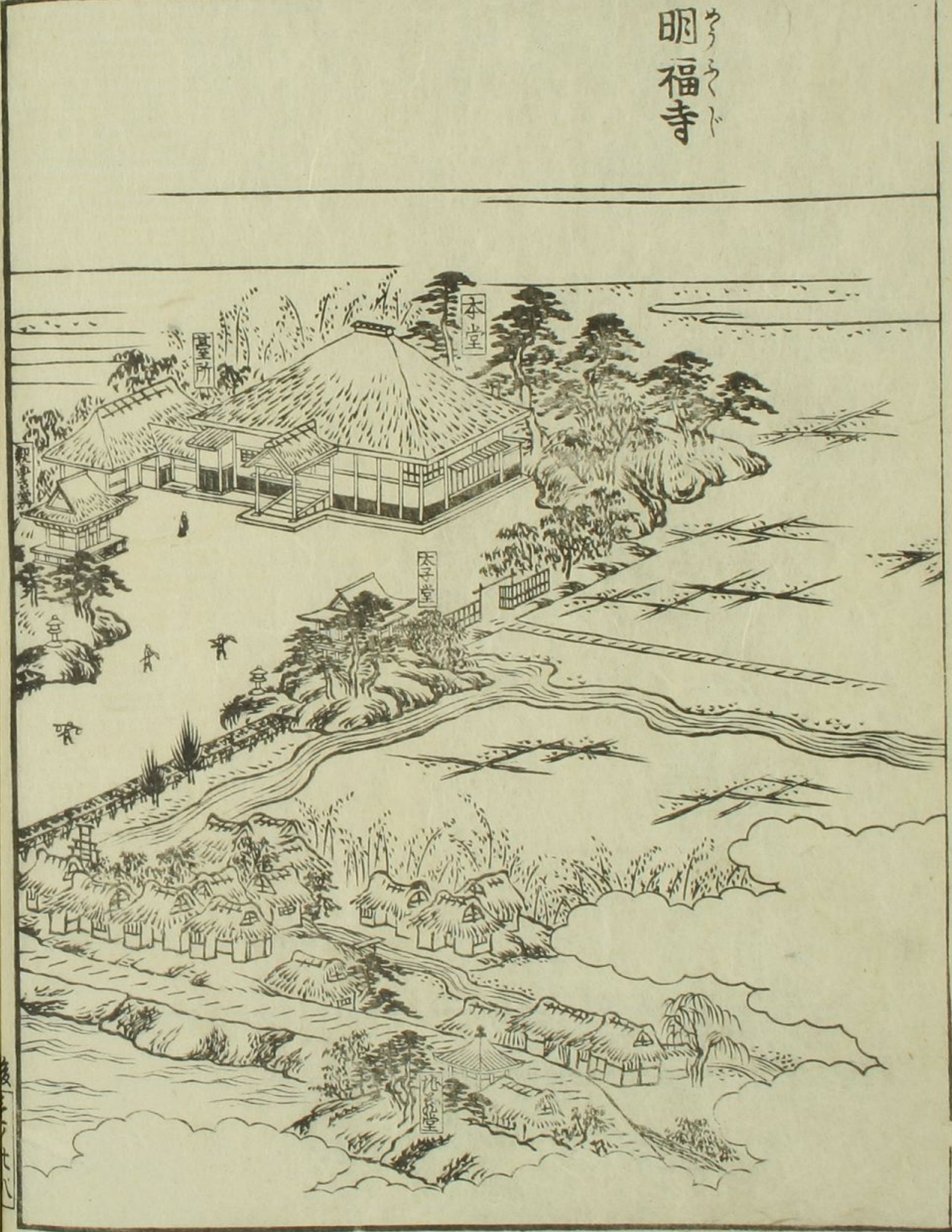
德皇泚本像聖人泚自他別

望を出く下総と誠る御るは文信堂加誠谷 柏谷 枚戸 幸て
粟樹と十六七里武茂の地ありけり武茂と下総乃境利根川乃
大流あり俗け川と坂東を即とより是より下総の中田とありこの
二十日鞆 泚拜は御るより南の方坂東を即り川下と下総
乃市川とあり園宿り城下と誠るなり委實に下総の都と著

○是より以下西光院若後寺乃四法ハ泚拜乃降洛とて再び
に府入るる系流とてき寺院ハ何と困る乃例ハ泚ハ何に極死を
記し泚降る系とてい寺号と綴御のと記と初卷山州



明福寺
Myōfukutsū-ji



山科及び本道は天津近松寺等の樹の下

西光院

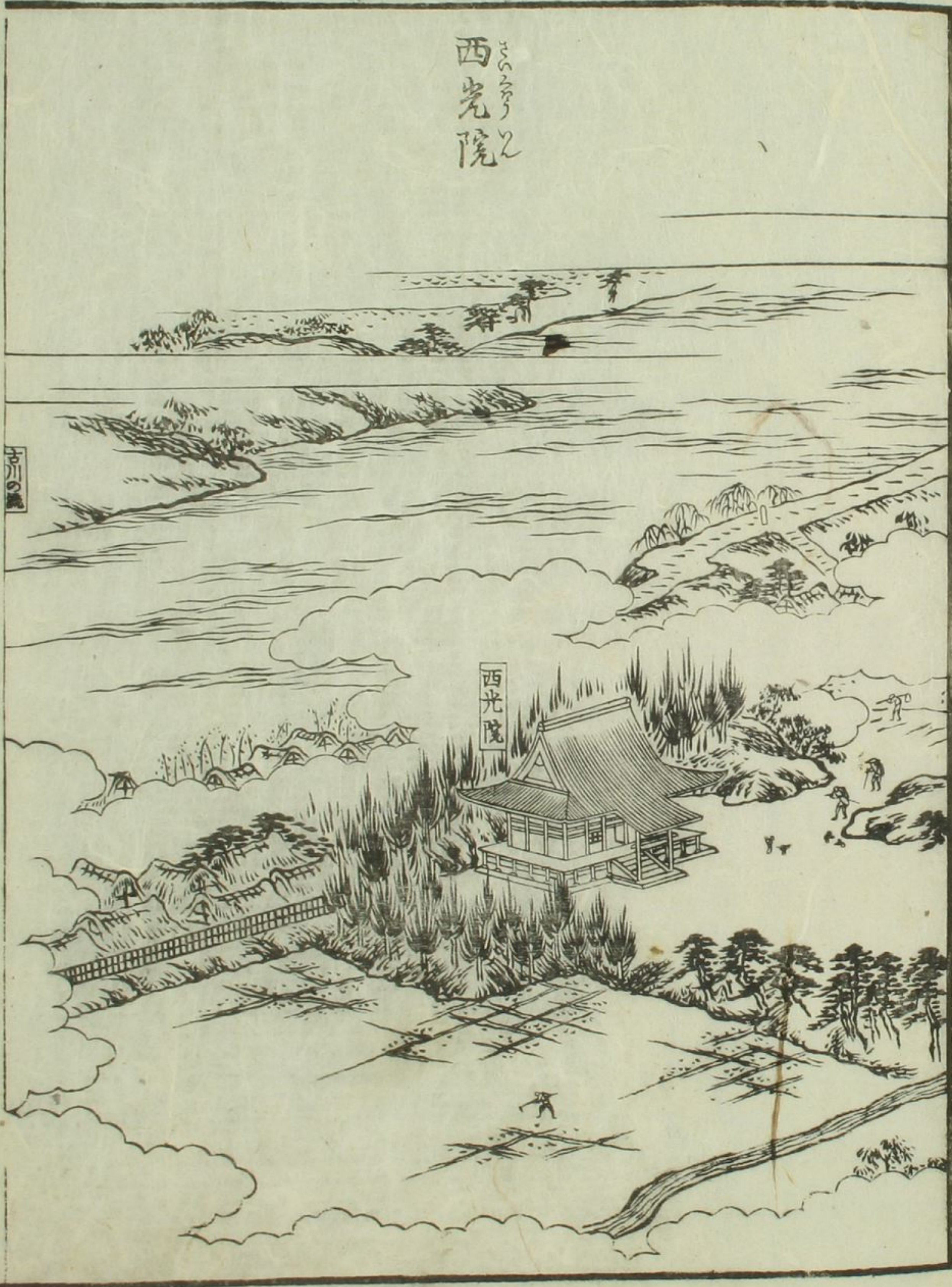
真言宗 武尾園二御半の地
本黄河村あり

當寺の境内に別堂ありおむく堂と名く高祖聖人の真
像を安置せり毎月廿八日毎に開帳し香花燈明と佛
以諸宗ともて釋集し殊に祈禱と込る時諸病と平癒し
靈驗實に彰りて諸人の信仰深きなり。傳曰當神當
國の神田といふ所に親鸞聖人の真身西念坊一宇と建
立ありて聖人御自他の真像并西念坊の本像と安置せり
是と長明寺と号然る小茅三世西祐房の代建武の乱に
寺と破却せらるけし時西祐の伯父西光院に住みあり二樞
の本像と西光院に持来り寺造の深田に埋強せり奉を
祇て世の中釋法に傳りて聖人の本像と埋強し田地のむく

おむくの
馬像



西光院
さいこういん



吉川の

吉川



木下村

勤めきつるふぞ位位心懸き其地と掘て凡れ二井の本像
靈光と現れ出給ふ濃く奇矣乃る像地中よりしりく
と於て是給ふふれがて信唱へく是とかむくの像と稱し
なほ其後建仁長命寺并に世了順房信州より来てけ
二極の像と乞求むく人も聖人の像の靈光にけり
はしくく諸人の信仰深きが灰燼にて是と返く文に
當寺よめられたまつり西念坊乃像のくと長命寺え
くしつりとぞ安へ

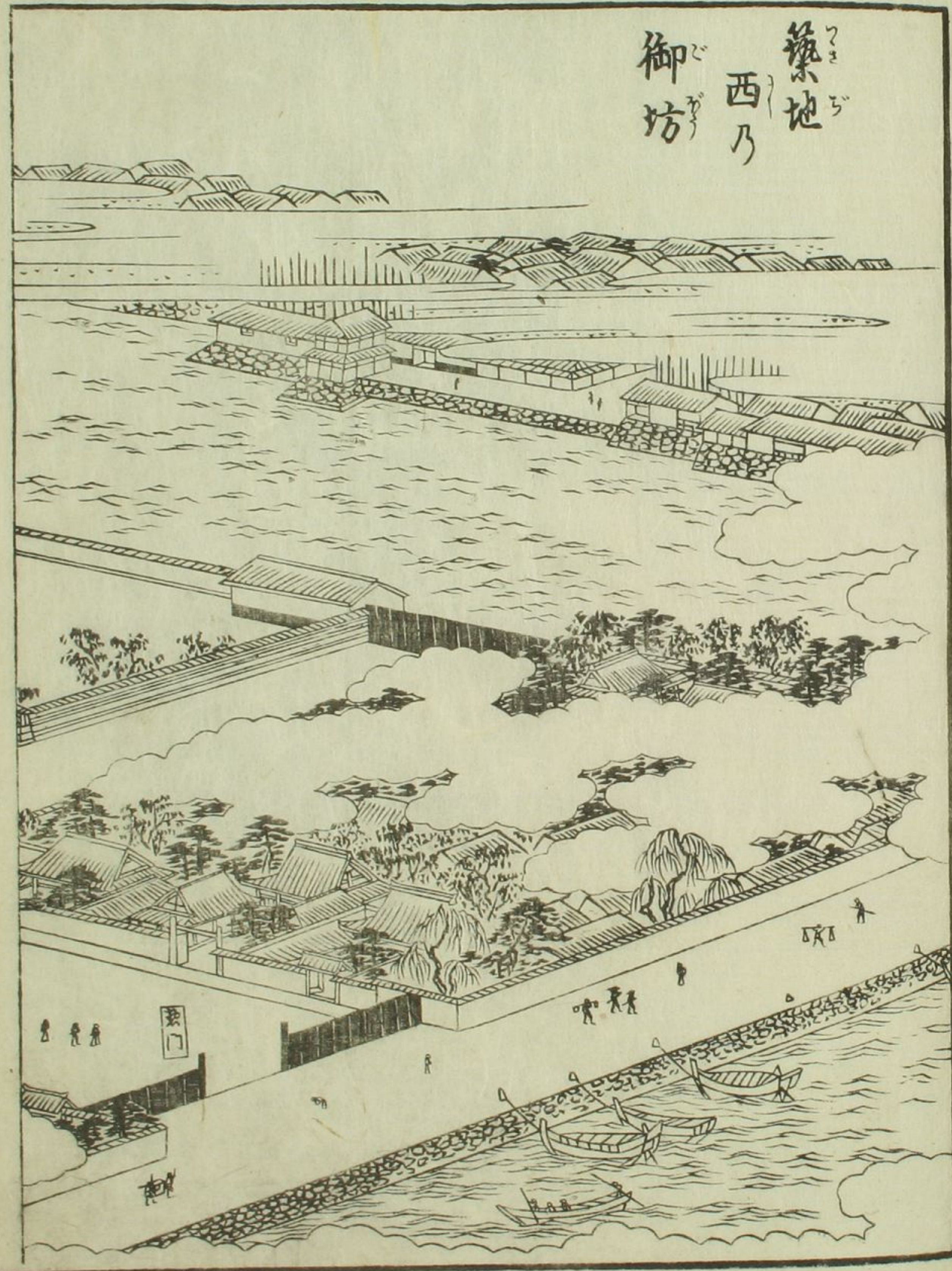
○龍院の池とくうりにツ谷とて中村若後寺とのみ澤と云ふの
寺内ありけり市の市又流る水石の水にけ池より流し出
るとり池のせううは揚榭しく生ひく池のせうりの色ふく
いなる早冠もけ池ありくくはしとくや寛永の辰葛葉乃
まけ池の邊りて午膳せよ池の岸は淵より水面(其長三
六斗の暖池にけ出け芝刈まを吾人とけ芝刈波のまは

目覚めて見るとはけりゆをけり池の大きき馬のけり大蛇と
うひのけり池と一帯とせんとおろけとえより不款乃まて
たれい給ふきまが芝刈通の利とおろけ切えらけい難をけり
亥卯と働きけり小大蛇のけり咽のけり三極に極き切られ
いけり極のどき悪鬼と吹けけ働しけり(我ひ)がけりと安
てや郷中の百姓三十人半むくり来り働けりくまをんじ
ておろけたれけりけりの大蛇かきけり水をよまけり入
芝刈まいりけり命助りけりまてけりけりけりけりけり
おろけれん同給悟れりて死する者被殺せり急不とや働け
らん池ありけりおのけり後日の後命給てその終ありけり
池ひけりけり聖人多其骨とけりけり高妻の町方(けりけり今その
家にありけり)

藤地街坊

本堂二十又間に面置さる堂

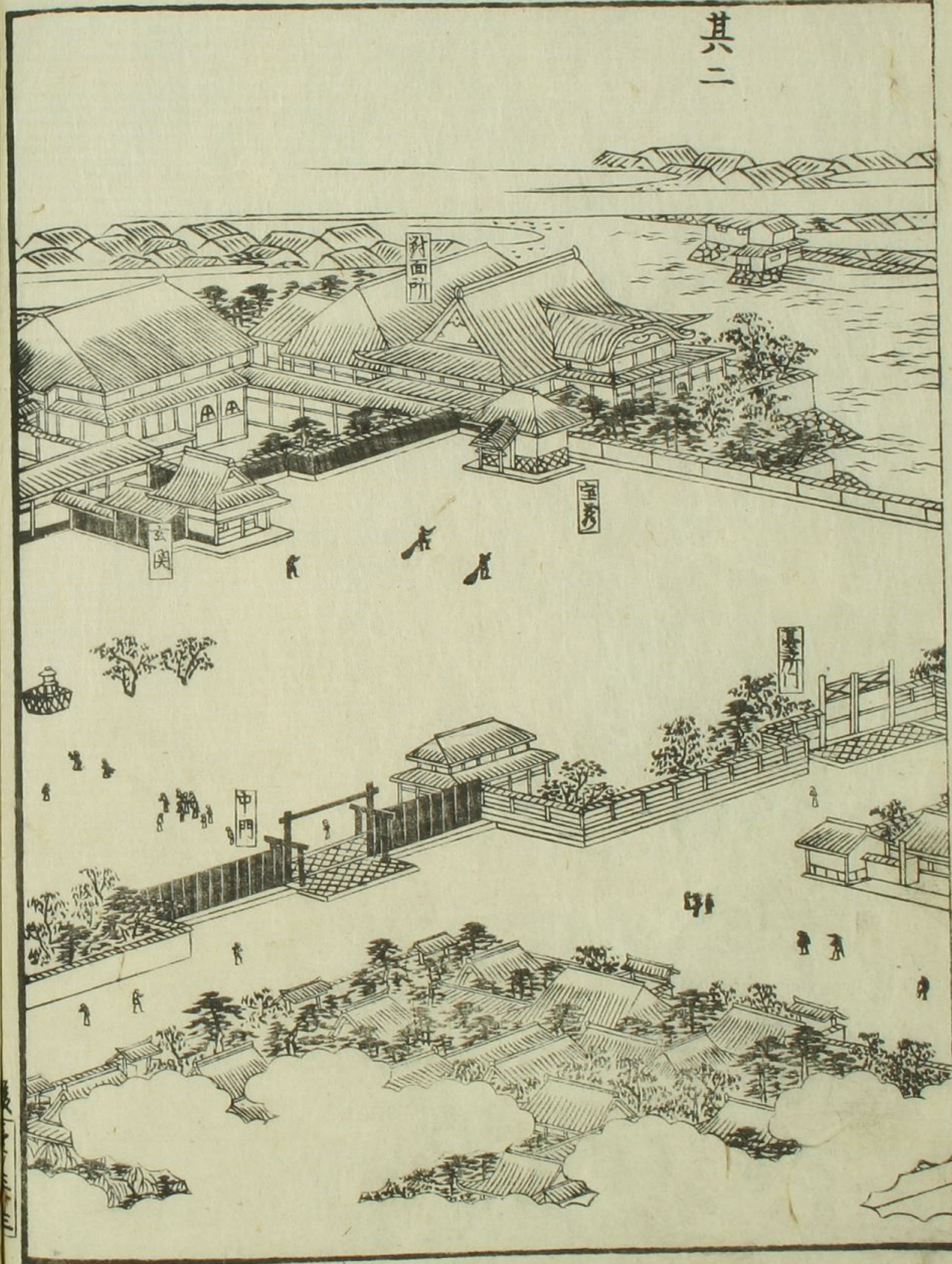
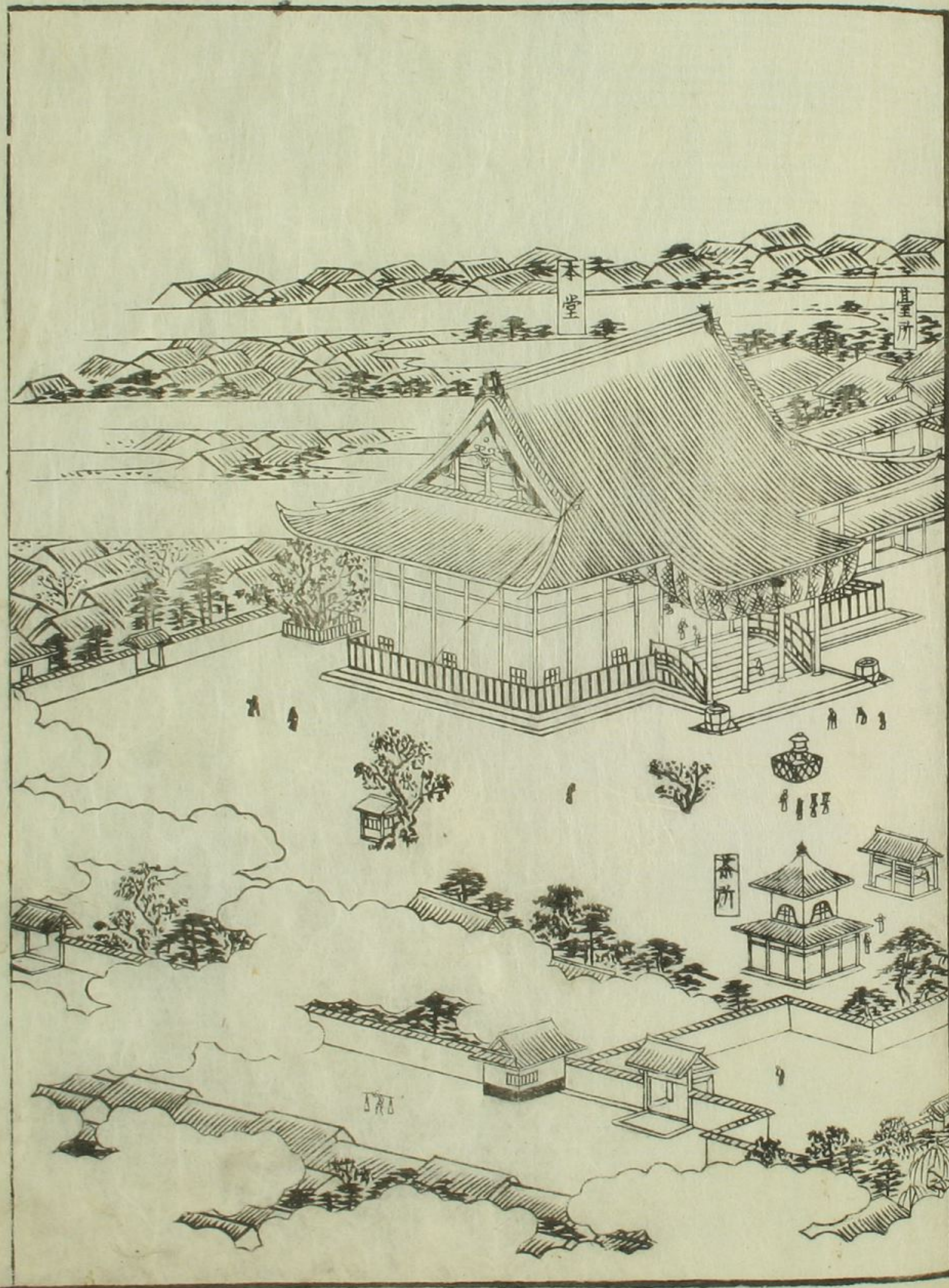
○藤地街坊の西本願寺街門法街坊所
うへ通じて藤地街門跡と稱へ
右の方面あり
惣門の内僧坊又十八ヶ寺



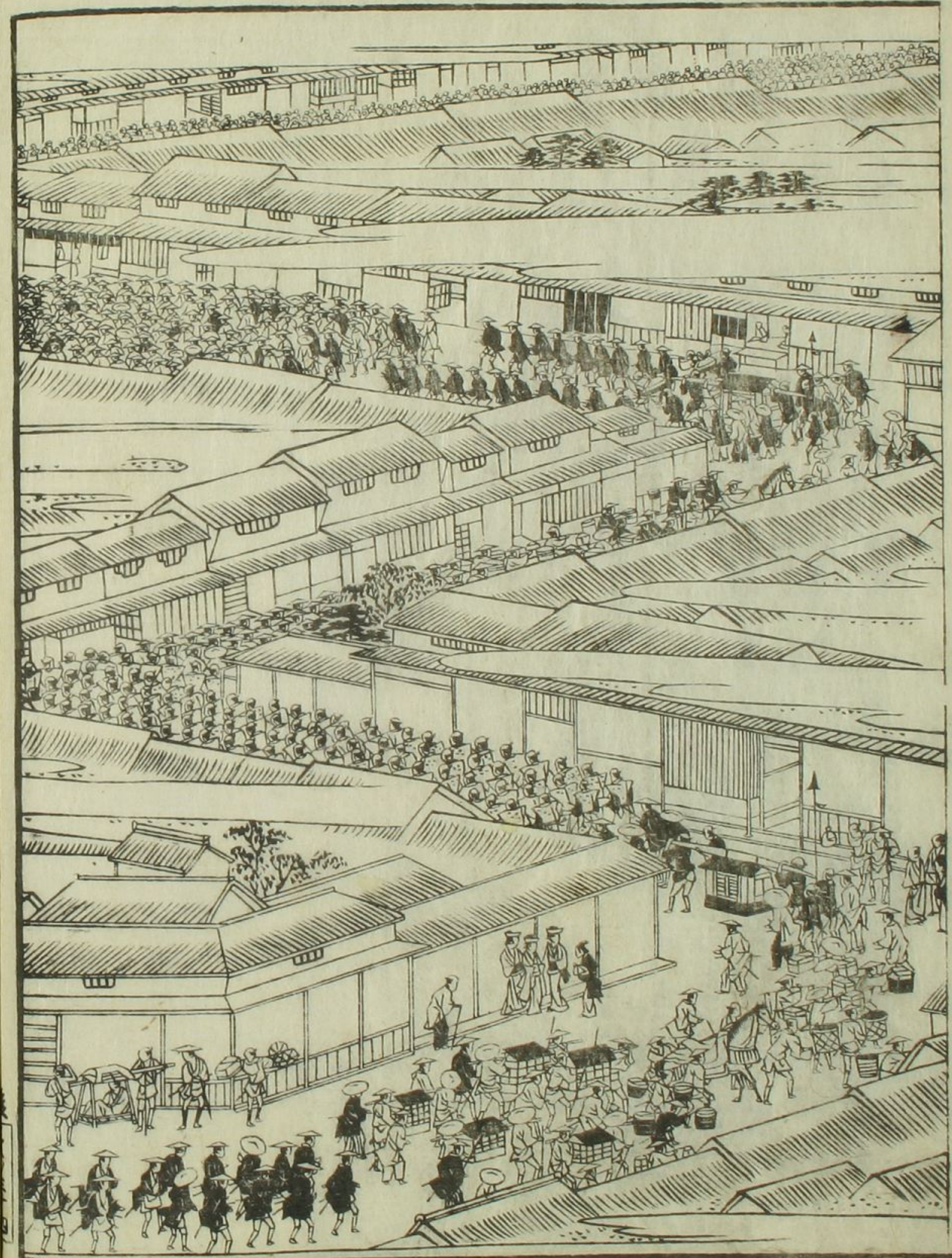
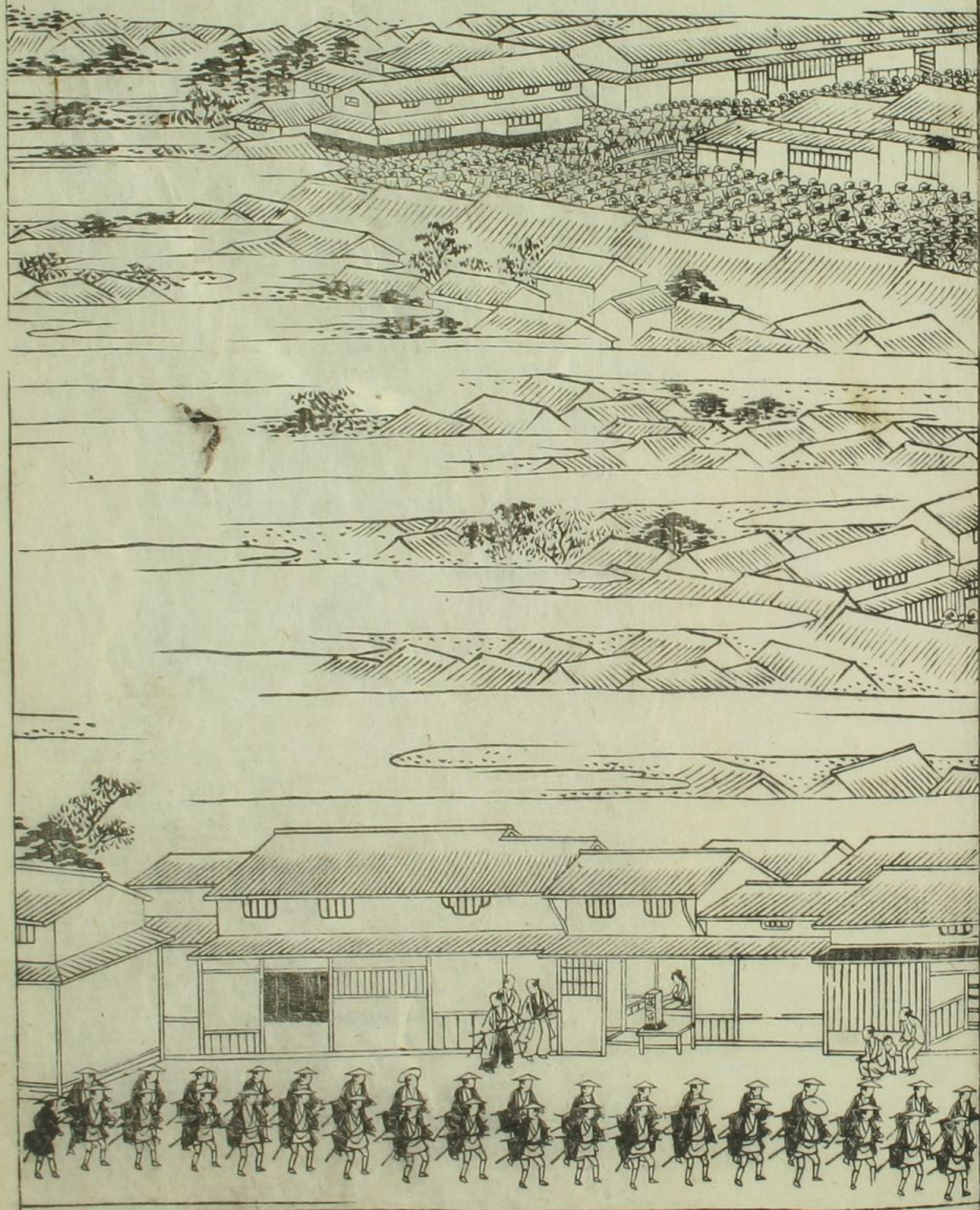
御坊
西乃

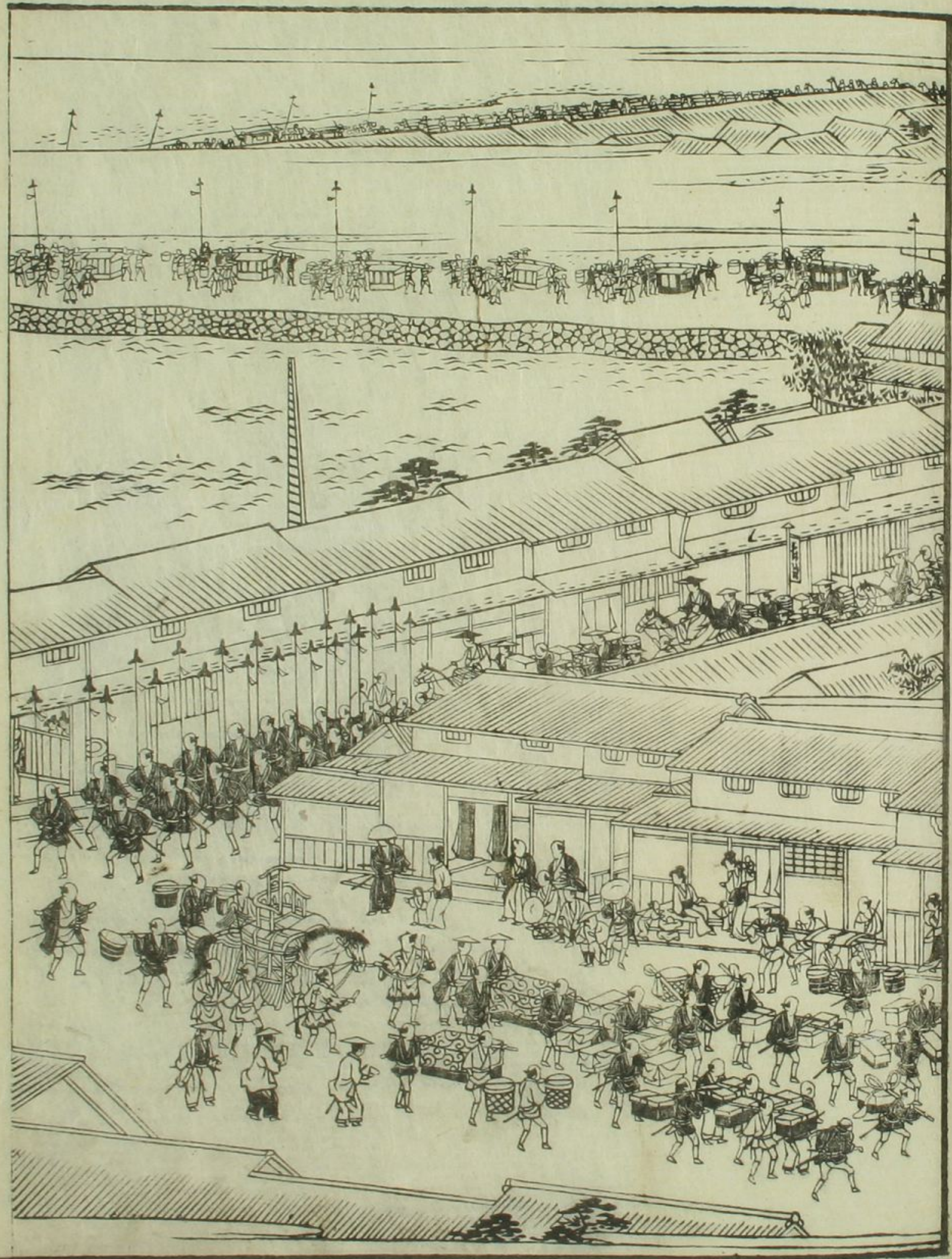
○高御堂の秋麗山麴いせりとして東國を冠すり京師
本山より官僧と撰ひ出坊の論番うりしせ

関東の末流を提轄しとて門徒の輩を以て宗法を守らしむ
河門係系存りて世終り時の出坊入らせられ河門下の僧徒の
中にも及び江府の美妙隣園道村の老少男女日くを群集し恐敬
偈仰の感涙は後々河門係系東叡山増上寺等の河佛系に
も若後乃の秘藏統として諸人目を驚し河通の道筋門徒
の僧俗肩を推補をつし秘拜礼の式実な致し路開山聖人河在世
滅どるるなり諸侯方乃使若車馬門系を群連して市をる
且河法より河修好は終り其ありさまの巖なる後どは
語なり
高祖聖人河修好乃源法師の裔なり
○三塚山増上寺の堂は在る凡海去るそ人皇百代後小松院の河

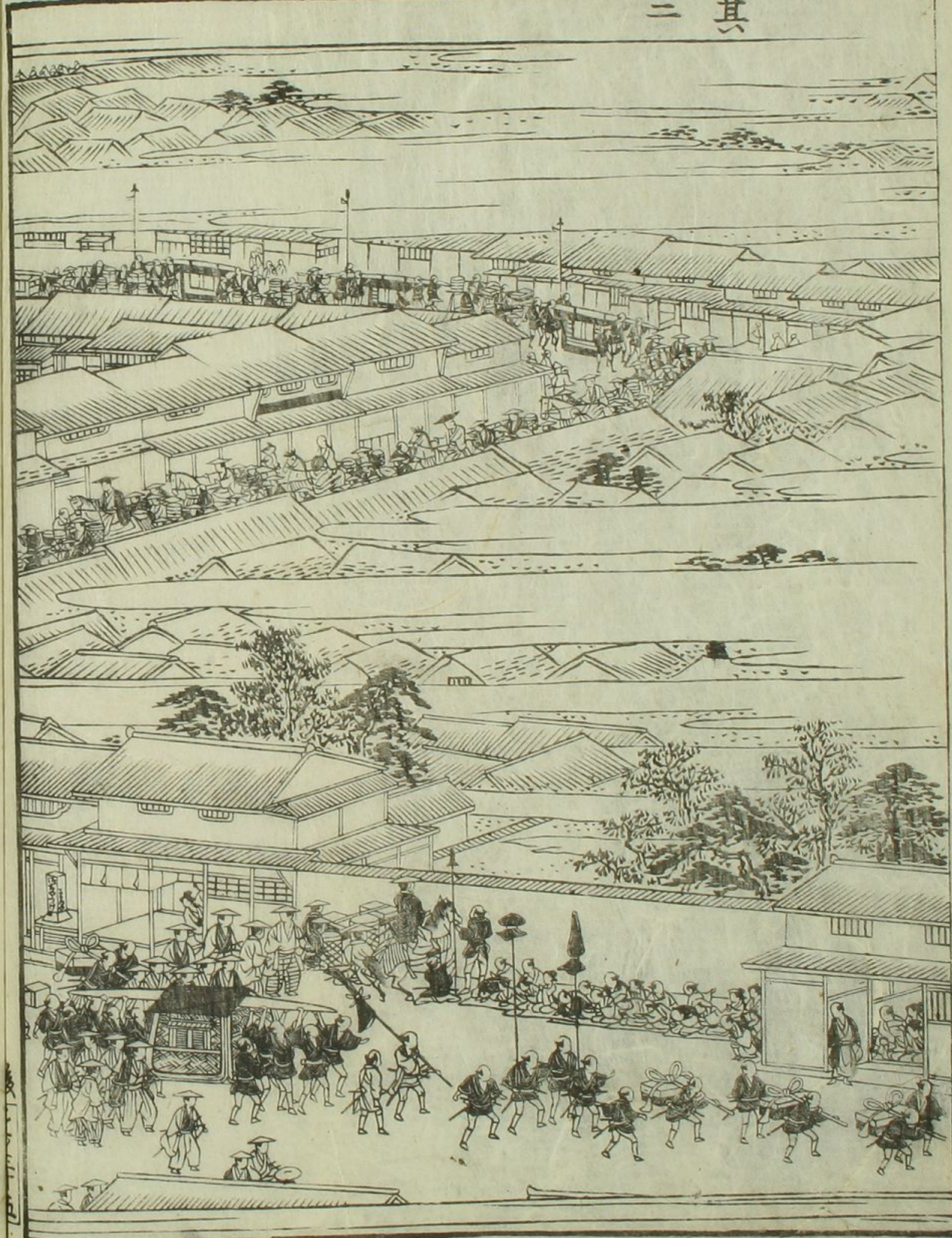


江戸門もどき通りの図





其二



至剣用基ハ西登上人因东十八ヶ寺檀林の想を寺之ありと
 内蔵と修りたり満庵支那の系徽市ノ下ニ七堂とて堂宇を榜金銀
 と樓の庭蔵以寺中坊舎三十に寺不化の寮秘百箇天下を双乃
 霊場なり

龜子山若福寺

西流 江戸麻布あり
 洗家

龜子山若福寺ハ因东七霊場乃陸一ウク聖人真身六
 光僧乃身六了海碩徳の遠流之本堂本為阿弥陀如来
 惠心僧都 用基堂 了海上人の 坊舎十三區廣庭大なる銀杏樹
 あり出院ノ境内廣大ニ一ニ殊とら繁茂第一の地ニ
 心豪家ニ高教百彩華を垂建連立不け遠とて出寺
 乃領地たりとも一ウク。支出山の用祖了海上人とのる
 其俗姓九なり比鳥羽院の苗裔大信實公の貞男
 かり信實公東海ニ放たれ民間ニたりて武苑の幽邃ニ

ありて年と経終り一子なきを憂て苑王権現祈誓
 一七日乃丹誠を抽どり其妻室夏又白布と吞むと
 看く即ち懐妊せり煮又延應元年六月十八日
 一男子と産り名けて松若と稱せり七歳の時夏の若
 門々実相寺龍賢律師乃許しりて出家するに
 を教ふ龍賢ハ児を教示修學せしめ名と了海と
 呼びけ了海博識多才一ニ三密瑜伽の妙法
 又通達せり又叡山ニ登り静室僧都と作しに教團
 融の理と究め中道実相の觀ニ明らり其後故郷ニ
 降り又母の年齢ようやく神海へ了海又值りて
 よろこび愛よこまらしめんといふはよ門く了海
 弘興の基趾を求めんがため藏王権現乃社祠ニ



了海 碩德 義王 権現 威ありて 若福あり 基立に



後三十八

治しくこれを祈るも不思議や天より白幡降下り
 木の梢に掛り了海其と後より見ると一宇の古
 院あり 今の若後 干時一人の老翁忽然と死に若て曰く
 何れ了海汝と然る事久しくは精舎を弘法大師開闢
 阿る不^レ^レ真言密乗の勝區之今幸又恒持る若
 仁^レ休け院止り有縁の法を求めて末代弘法せよ必
 濁世海度の知識又値り阿らん予は是年尼の愛他若王
 菩薩ありとて立去給ひぬ了海大に悦び即け寺又恒
 職^レ朝夕說法を^レ多^レり^レが義王菩薩の御示^レ
 末代乃要法を弘通み人き知識何人々やあ^レん^レとひ
 ぬい日を送りけるが爰は高祖聖人の教化都鄙^レ番
 く濁世末代乃若知識あり^レを^レ安^レく^レ叔此聖人^レ濁

弘法乃撰と試んと既又聖人又湯なり即高祖聖
人又向ひ三密加持六即止觀の法をなて同難なりふ小聖
人善なり終なりの郷音の善又應なりとなりとなり漸深理の説又
て曰く休なりつふ不なり滅なりとなり心蓮心月一念三千高きなり
るなりも濁世末代の衆生をこれをなり終なりの終なりに
戒なり五道の僧信なりと觀なりとなりの機なりありなりはなり志なりふなり今なり終
陀祖世の本釈なり念なり佛の真宗なりの末世相應なりの要法なりして
凡なりま直入なりの真教なり之なり則釋迦なり出世なりの本懐なり終なり陀弘なり釈なりの
密なりまなりるなりればなり汝なりとなり思なり惟なりせよとなり嚴なりとなり説なりせなり終なりひなりたなりればなり了なり海なり忽
又一念なり教なり記なり即聖人をなり拜なりしなりなりなりるなり重なり唱なり仰なりはなり降なり也と
約なりして日なり夜なり圓なり法なりの益なりとなり夢なりありなり信心なり飲なり納なりせなりしなりやなりさなりさなり
きなりされなりばなり了なり海なり身なりとなり終なりるなりまでなりけなり靈なり場なり終なり也なりなりなりるなり真なり宗なりとなり弘

法なりとなりるなりのなり終なりるなりはなり○佛光寺實派なり曰なり了海と人の元應
二年なり庚申なり心月廿八日なり八十二歳なりなりなり寂なりはなり武花園阿佐布
若福寺と号なり以延應元年なり誕生なり二十なりに歳なりの時なり祖師なり因なり寂なり
○高祖滅後十六年弘安元年なりに十歳なりのなり以真なり心なり寺なりに入なり
第なりに世なり乃なり寺勢なりとなりなりなり永仁元年なり就なり念なり誓なり海なり又なり寺勢なりとなり儀
武州麻布なり下なり心なり十八歳なり元應三年なりの春なり心月なり化なり縁なりのなり勤なりつなりきて
廿八日なり即なり生なり後念なり乃なり素なり懐なりとなり遂なり終なりひなりたりなり○了海
自なり他なりのなり像なりとなり用なり基なり堂なり又なり安なり星なり以なり毎なり年なり十一月三日なり又なり新なり夏なり盤なり又
けなり像なりを入なり湯なりとなり心なりて洗なりひなり再なりひなり本なり座なり又なり居なり人なり長なり孫なり陀なり經なりとなり讀なり誦なり
しなり素なり清なりのなり諸なり人なり又なり赤なり飯なり湯なり酒なりとなり互なりへなり廣なり座なりとなり相なり撲なりとなりしなり心なり
先なり了なり海なりとなり人のなり送なり云なり也なりとなり云なり○都なりて麻布七郷なりのなり町なり民なりとなりもなりけなり了なり海なり堂なりとなり修なり補なり
○享保の記なりはなり高祖聖人なり由なり國なり妙なり化なりのなり終なり也なり當なり寺なり

若福寺
角乃園



後
之
四
十

入給ふ了海坊聖人は御依しつ御并子とあり聖人又了
海乃枝を得く爰よとまり弘法行つせ給ひ御枝の本と
地よと給ひつるふ付林根者送よ生枝系に方又布茂と老本と
あり今又夜在了海永仁二甲午中冬上旬第六日寂せり
と達仁元年辛酉杯鐘十八日おせ筆記せり送踪録又是と心しつ享保記誤後
とく佛光寺の記録とて流とせり私よ抄りへらく出院
寺説のどく用基堂の廣庭又根杏樹あり是聖人の記
給ふ御枝の生しつるや世又終一人ごどのと是と稱讃以
然る耐ハ享保記又つよとく聖人け院又入御し給へるや
強ら誤説とて云々うら流とるにせり了海上人の年齢入寂
の年曆佛光寺の記録と大よ異なりつとて是なりと
せん後學これを紀せ ○什宝聖徳皇の御本像御自他

八字の名号等を安ん

○泉岳寺の芝の輪又西曹洞系に府三ヶ寺の内之用基門菴和尙當寺
又我士四十七人の廟堂あり
○日本橋の都乃目的とせり是とて諸方への紛種は是より是より橋上
より西の方なる小瀬河の石二の峯も是れ系橋の上より橋上なるの
堂山門名色多川橋迄て令枝橋芝橋の是よりたの方海辺とて
楓松也又細を曳き奥を名給ては瓜芝有と給はは石より小川又
あつ同右の方よ八幡の社あり渡辺綱ヶ守本寺の靈神カのごは保率
中は不に勤法せりつとつそ御傍の大佛圓應堂如來堂又堂末
皆右の方よあり芝乃平町より小川にまで輪繩多とつ海邊なり
遙又海なる泳つやまの船橋の森下徳表房乃海辺相州蘆倉の
沖も是れなり鴨居渡又いつ方沖の漁舟飛ぶふむむ霞のるふ
えくくは後なるはも及ぶは毎年三月三日は沖の波するは括は國
燈台の浦よもまより星の量多く干波又給ひ貝拾ふさまあり
り川橋の宿町しづれより箱根山名色鶴尾橋を渡り金川の沢あり
たの海邊右の徳理持沢の社當士の人充あり蘆倉の軍家御新
田忠考をりては人充と標しつ給へるは本體又是より是を記さく

